

門 8
467
卷 10



和漢船岡集卷第十一

目錄

用具之部

網類之部



和漢船用集卷第十一

金澤兼光編集

用具之部

舵カチ 字彙曰舵也正船木也設於船尾正字通云一作

拖又舵同和名類聚曰舵船尾也和名多伊之今

案舟人呼扱扱為舵師是也と云へり扱扱日本紀

第八仲哀記よるも扱師ハ敏達記よるも字彙

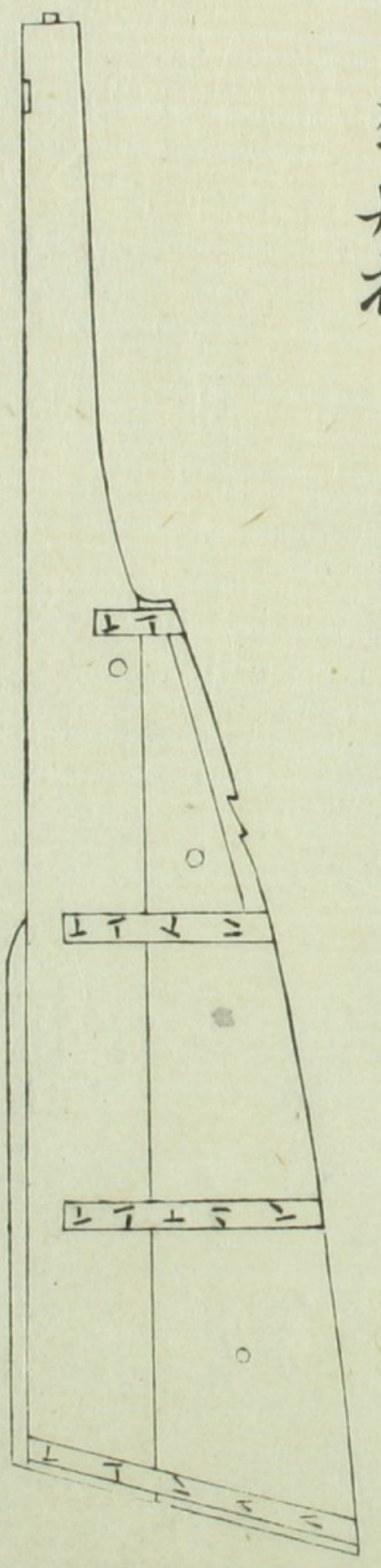
云梢船舵尾今謂篙師為梢師抄梢並は同又梢
の字帆綱の下よるも愚按多伊之ハ舵師也とあり伊
ハ船尾よしてかちとりのことあるを古道具の名よ
用しとるも今和漢可治とて和制うちとて此扱扱の

下よるる舟方言は曰よきも何きもかちと云控
ハ加持なりといへり是も處なり名法要集曰問加持力者
何謂哉答加持者神語也神代武甕槌神經津主神為天上
御使最初降下界拂平一切惡魔然後神孫降臨依之
彼二神今無跡之名云加四魔勝取又云揖取是則於
是則治彼秘術之起也故神功皇后異國退治之時
向虛海浮兵船此時以神明之詔語初而作揖御船
忽飛行自在也其名稱加持取彼兩神之佳名得此
名目而一物之上具三元加持之事相者也假令取握
此揖者神力加持相也動此揖者神通加持之相也依此
二加持力改其行先赴願所者神變加持之相也初

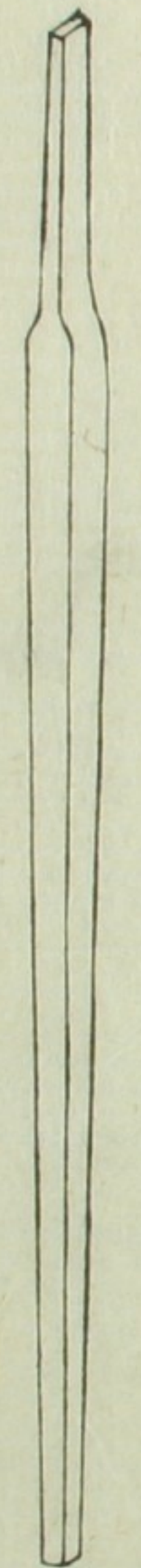
二加持者船艦修行成就之神壇也如意成行者船之舳之
瑞相則三妙三行之神熊也佛子謂加持者神道之名目一厚乎
三國相通之言語多以有此例云尾州藤浪時繩神道篇云
曰或説は揖と椀と仍の握は和字也神道揖は祝の揖の字
と本篇は沿より云ふや但和字加持と椀相通をれ云云
せりといへり中臣後不加地とあるは向投也曰舊記云曰揖
似加持故名揖曰加地古傳は曰加持以椀得んといへり
総州本佐良津八幡宮神主勝重治云曰神功皇后始製揖
也先是有加地之題目以楪得名者非也若彼帝以前每
加持之題目不可曰非也加持之名目彼帝以前有之手と
いへり愚案神國をれ神代より神道加持は方は又天神の代

不較多船行れハ舟の楫も神代よりニ長し既又天孫
降臨の天比呂子又神武天皇東征の御舟楫ナラハ有
ヘリ神功皇后虚海ノありむき流々又楫ハ舟ノおの
ろもとの具方ナリ神代流流行のりもさくか地を造る
しめたまふりさ始の二字解せらるるのり或曰楫の名目神
代より傳りぬるるのりさくして今か地を造るるを
別神代の流流よりさく神功皇后始て製流流よりさく
又神道楫ハ神代楫と云篇と云篇よりさくするやと
いふハ此ハ異國流流の舟楫ハ楫の字ハさく又名目曰
しとろのりちと船といすのりちとろれり神代神代ハ
船流流といれハ楫也神代持ハ船之端相といハ船也

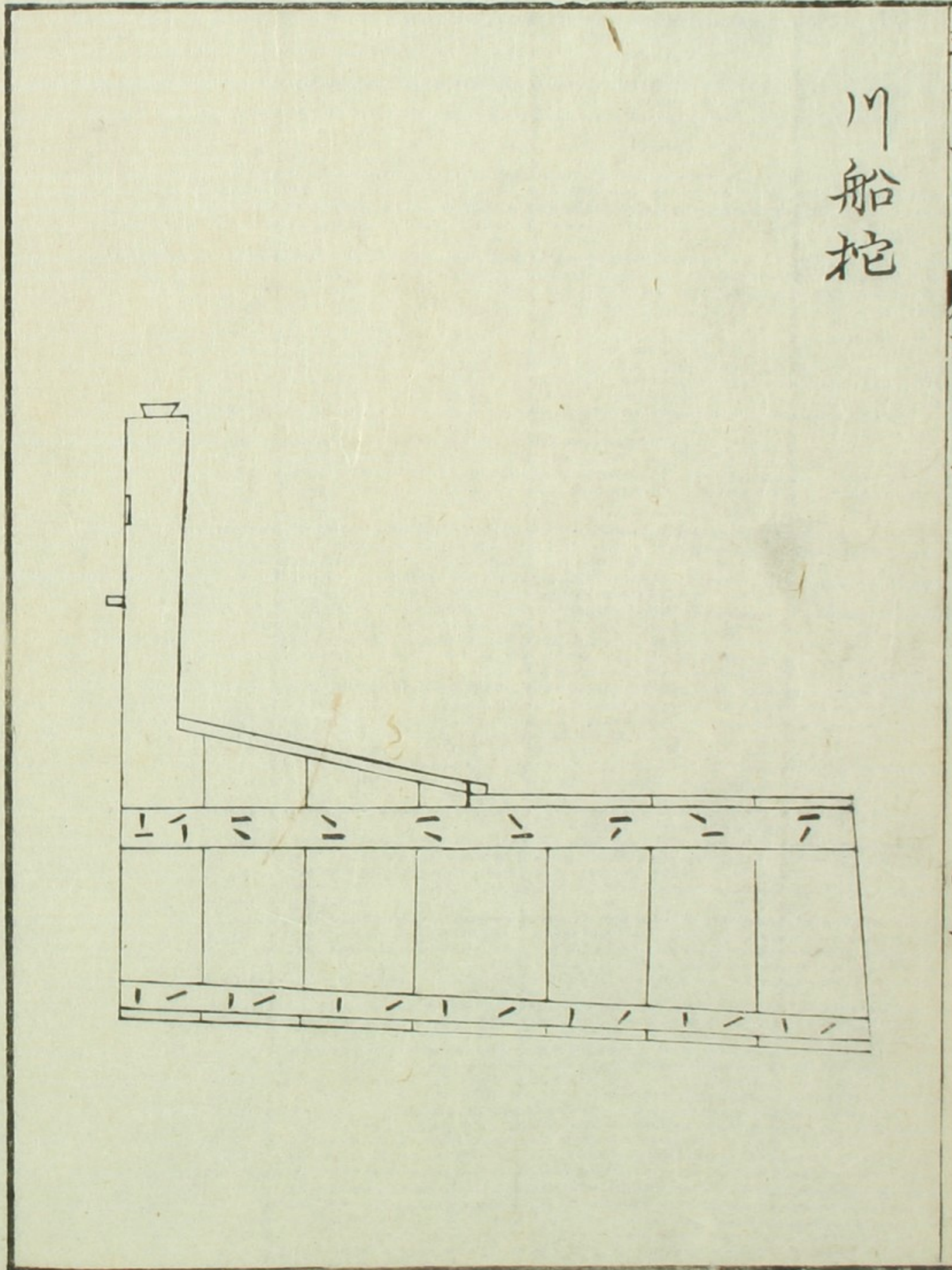
海船舵



舵柄



川船舵



舵の小名 身本 又身本と云 頭 又頭繩完 上大目 下大目 下大目 舵柄

落込 或ハちつまうと云 羽板 明律考舵にちりまきつと云 羽板 ハちりまきつと云

と云 船甲 又のり機と云あり明律考 船甲 又のり機と云あり明律考

上機 中機 下機 又のり機と云あり明律考 潮切

水越孔 又ゆりこ 身本 又 小水越 羽板より

轆車 を付 輪 羽板あり完 又 又

川舟舵の小名 身本 頭 大目 權架 カキモタセ

羽板 端入 上機 下機

偏舵

明律考よりあり船の偏舵は用唐船よりあり
本邦用とあり軍事等よりありハ根構より

轆轤

是も唐船より用本邦よりハハ國船
よりせと云毎より用は二名舵の名也

舵卷網

舵を卷よ納るよ
すきりくる網あり

頭繩

よは日沈定より一舵をけの繩あり
藤垣よりちのよとけする者あり

水越網

或ハゆりこよと云水越定より通
舵より自中よりさくる網あり

小水越網

大船の下より一舵の左又右南蠻車を付横より
南蠻車を付網を巻く自中よりさくる者

虎掛網

又尾掛とも云舵の尾より掛く檣本より網也

明律考虎尾からひくつると別と云る者あり

前掛繩

舵のあよりおまりより車立へとけの繩也舵おま
りとも又大船より船首繩ともいり

後掛繩

川への附舵をあきめより別ある繩也大水越の上に定は日沈
そよふかりこみ舟本の内より車又およりて船胸と云

舵柄

又舵棒とも取本とも云舵の元あり明律考
舵牙と云和名は船柱よりあり

くらみいふらき極のありと云らりらと云と云へり
万葉うちりとも云これほど季吟白毛所舟のうら
柄よりありともい新よりとも云といり

万葉
玉きりりのちふむくきよりい若くともねれら柄より
松川百々
ころめ刈海人のいさねらりらと云りらと云のまをき

トニス トの字偶字未考加賀考の細引細也又ト安とト栢柄よりけり引者風切るとき時ハ赤船も掛て栢とト也又九列りくトウスと呼

檣 ホハシラ 檣桅蓋は四三體詩蜀客帆檣と作れり又帆柱と才文選注ハ百尺ハ帆檣也以長木為之所以掛帆也

又將ハ帆柱也又檣ハ檣也類書纂要ハ桅竿掛帆之本也又曰檣若木詩東坡詩ハ捍索桅竿立嘯空如月和尚の注ハ桅竿ハ帆索を付り竿也又杜詩ハ牙檣と作りり注ハ檣の尾銳と云れり檣ハ名付と云くしり和名抄ハ曰和名保波之良

本邦檣のハ檣草植と云て造り今ハ大木希也この故ハ杉と云唐土ハ大船といへとも帆柱ハ大

ちり檣と云りことあり何本と云も他と云へり皮目体

注ハ檣却返用禪 ヤハシカリ 蘇注ハ柳本と云く帆の牙檣とす

檣小名 アノカタ 剗形 筒の剗形 雨掛 剗形の上と云

拜座 或ハ這座ハ他カ 折込環 折込環

蟬 セミ カウロク 明律考倭輓と書蘇竿の蟬本は四一帆柱ハ合尻處と云

の口と云 誤抄あり本ハこの本と云く作る者也古賀之本正字未詳檣の柱ハ他と云いりも人け道ハ何と云と毎は同じあると云へともせみハ他と云へともせんと云りやまりて注せる方へ一ハ檣と云者ハ繩と通帆を捲破をあけ柱を巻傳るそのおと下一管ハ檣の車より細とろく細とろくハ引ある也繩と車と擦合

つゝくみの本を引付ハ火出の者也古々の本を引付
ハこそ災ふことなり

禪挾 セミハサミ
帆柱の末

箬 扱撥の上へあす
折帆柱の末也

桅門 キミン
明津考よりらのせんべに桅のせん箬結とくくると
標をいへて造る又水筒舟柱と表よりまゝあるは箬舟用へ

桅箍 キソウ
明津考よりらのわと淡せり 本邦大船此桅とまゝ
一本あまれちりゆへお舟おとて四方より末と舟

舟其上の鉄の輪と幾れも入ル是を素込鉄おとてけり
又唐船桅を絶若けりけり用

柱引 ハシラヒキ
帆柱まこくりに舳艫へ引綱也引綱ともをいへり
又先よりいへり

折込網 フリコミツト
又根上綱とも云橋をさる時ハ折込網は付て
す故折込網とも云橋とくは折ハ引上る故根上綱也

折込子 テコ
橋まこくりに又ハ破おこる者なり

天絨繩 アニカラミナワ
橋を帽子或ハ筒扱よりけりけり繩也 愚按
連衣を着たて云者も不けりてめ繩ともいへり

帆筒 ハツラ
帆筒をぬきむ繩をけり今云けりまゝの繩と云へ
後船折廻し
のこは又云の公水繩と云へりお舟ハお繩の下に
置てお舟

箬緒 ハツラ
雜字大全桅索東坡りゆは棹索と依より如月和
尚は帆柱の上はけり繩をりといへり箬緒とす
帆の箬よりけり表へ引綱を故箬緒と云を末とくり

根縊 子ククリ 管縊の根縊也水押は打廻して有聲なかけを根を
くくも也或ハたまこも又首くまも也

帆摺管 ホスリクダ 或ハ小柄と略管縊は竹の末柄の本を引くつら
管縊母子ヤニをゆりけ後を通し珠粒のこく

つらく者管縊の損せつらやうに帆のまれよして破ま
さうやうのこめや、若くは用

蛇袋 ニヤクダ 管縊のこよま小柄のこふ竹の若草うそ竹或を
よこれうけこも又二布とよこ帆摺とよこ

漕列舟 カサキ 舟のこよまのこよまの舟をぬよよりてうらへ

統 カサキ 淮南子注曰統者候風之羽也楚人謂之五兩又

纜同定風旗也本邦用こく帆唐船橋の上は
ありて風又也かさきりと列に

帆竿 ホケタ 和名藪藪曰帆竿和名保偏多今帆柄と事帆を
くく上の横本也本捨括とよこ今今もく杉を

刃蒙國彙竿ふらうらと後ろハ字の彙は挽ハ帆竿
也とよこよりうそ又舳舻のこく和漢遠行り愚案

新解人東郭の船帆柱城もふ丸く化れり唐船すて
丸柱ちよハ竿とも云へ本邦の帆柱ハ皆前柱也

竿とらへりハ丸く化れり後ハ竿のこく帆とら
くる帆柄也衣柄とよこの也順和名抄の段ふさうくし

以と橋桁柱の道具と名舟船方まの具也

桁お廻 クダウチシロ 大船ハ竹とあてて下けはさ中よ打廻し橋
の端よして帆のちけあらし子き板のまきり不用

ウチニシ
お廻

橋のお廻也帆柁は付て橋のまゝなりよきものなり
連衣カウフキヌはつと止め繩の後には橋を立帆とよ

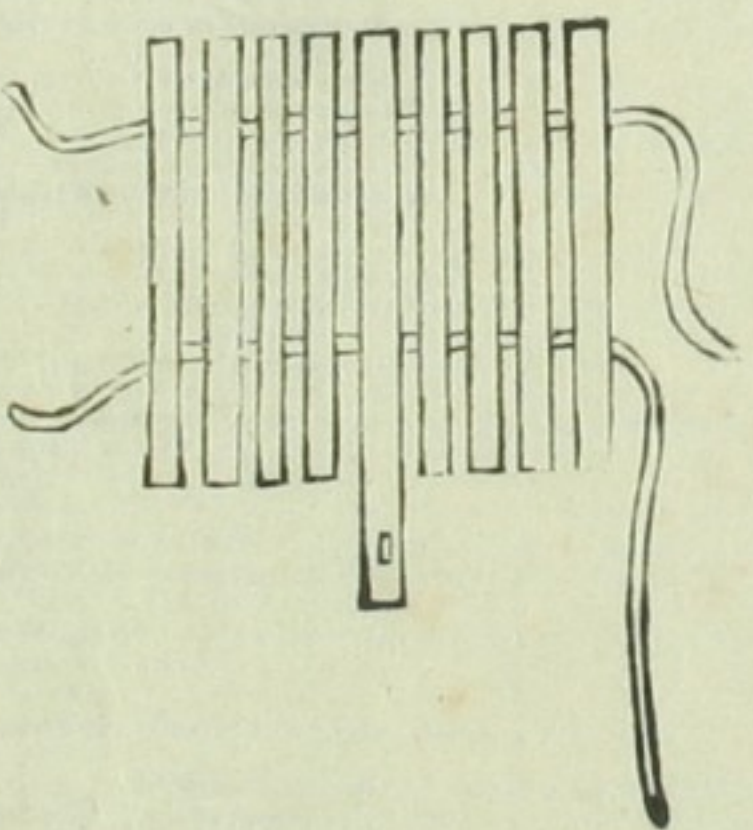
付居るものなりけりたるを蓋のやうにあらせんと
しらまはしはしとさくしと止めのちのちあり船はし
その様すゆりといふものを通せりお前ハを地ふ舟の
橋は筒をつけりあそとくりつけりお前ハと筒と
まお廻一のしとさくしと葉はれとハお廻一の繩はり
おと本とあそて付ハ後製也一お前ハと止め繩とまも一利を
といへともけ繩ハ柁を付てまもとくりつけりお前ハと繩はり
ら今お廻一とまの産衣後注のしと一横を引て是を係
其本と小様とま一ツふあそつと繩とまお廻一のしと

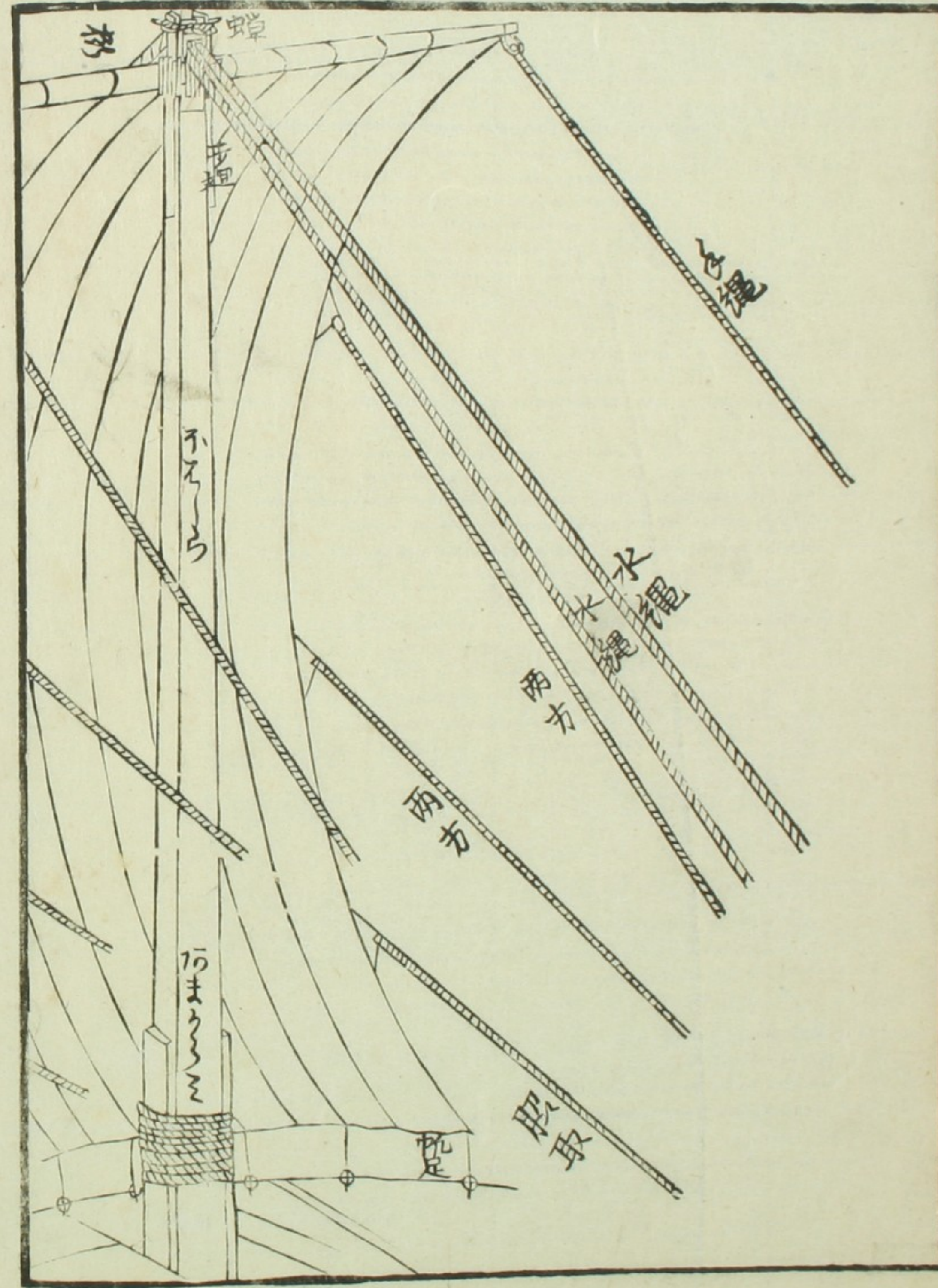
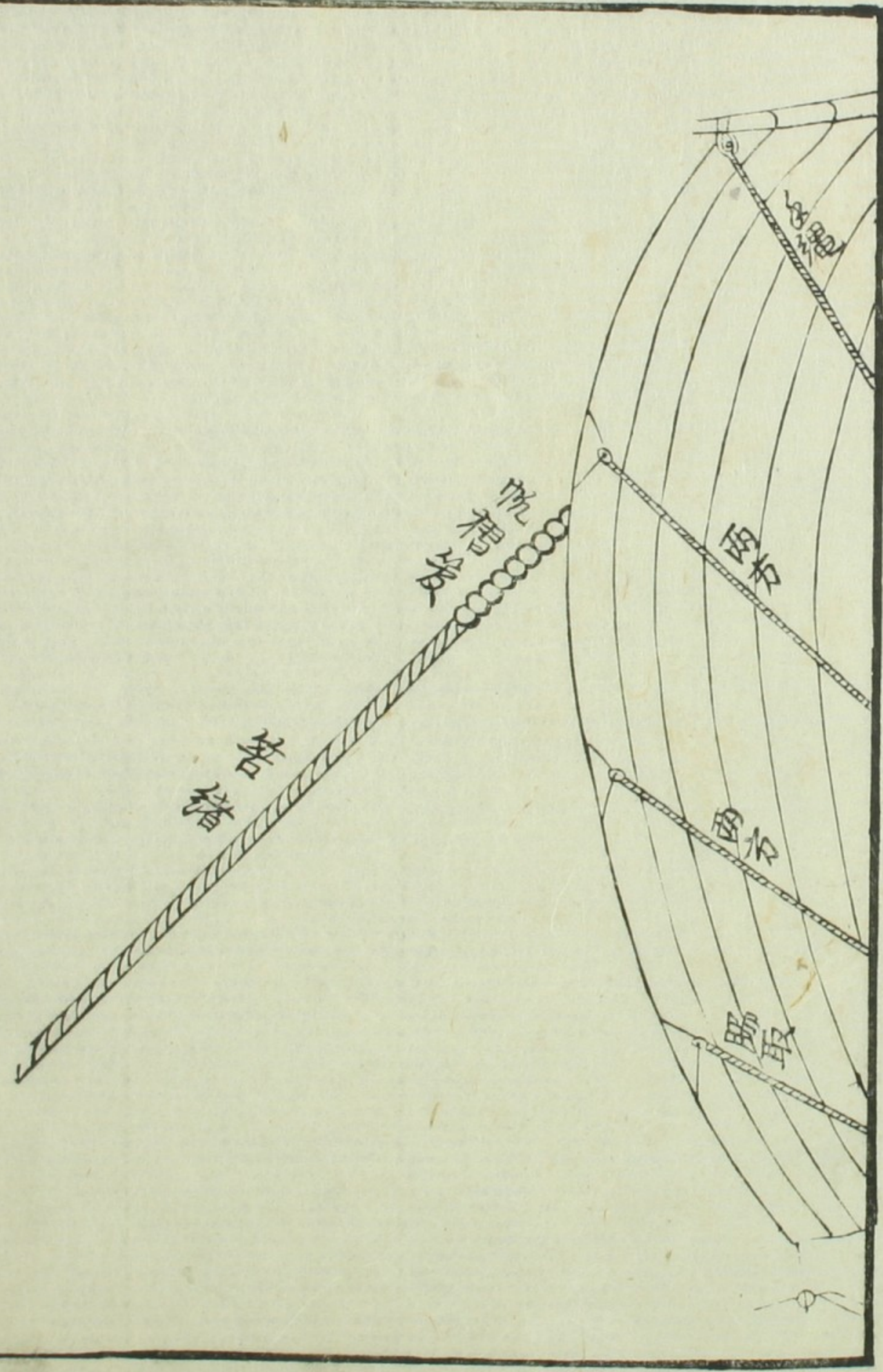
ツホヲロシ

帆をおろし繩也お廻一の中は長さ本一なり
船は完をぬけ完は繩を付て立帆とおろし舟
け繩とて引おろしお前ハツホヲロシのしと繩流ハス

ミナ
水繩

船字大全繚繩 風繚明律考繚母繚索並は同帆
竿はつけり船は引帆とあそ繩ありお前ハ一水繩
ニツ水繩ニツ水繩四ツ水繩とまも船の大小よてあか
ありとまも帆つと止めと後ハけ繩あり一産衣のし
まもハあまうしと繩とまも後注はてハお廻一のしと





帆を納む枕を紙よりたききしをくるおの帆のけり舟と
いへりま帆片帆かとゆふをぬく帆よりけり名名の帆の
と又ゆくまきろあを明律考挿花まきり不と州
帆うく此名也又帆板のふを海船の帆に枚帆の下
まふくしり

帆ヌイクタシのヌキトラシ小名 継下 貫通 明律考帆節 耳索

帆足ホアレ 逆帆足サカ 大廻索オホマヅ 又大廻一と云ふもまきり不と州
横よりとるの廻一と云ふ

あま小舟帆もろれつとろろをいふ此浦ふ浪たると
はのくとありはるぬとてせは其の波をけいづる舟乃不
夫本

帆之品

錦帆キンハン 烟華録曰錦帆サイラン絲纜ヒシヨ又秘書包佶安部仲磨と
送るは錦帆キョウ氣風轉キキョウ

繡帆シユウ 傳遊録曰白舫百棹皆繡帆セイレン青簾多載妓女

絹帆キヌホ 御座船こゝろ官舟も用

木綿帆モメ 多く用所風は遇て破れざるや糸をよむつと帆

布帆ヌ 書曰行人安穩布帆アンラン無恙三體詩注曰顧愷之
嘗借殷仲堪布帆アラン遭風大敗愷之與仲堪

笹帆サ 細代帆と云武備志又帆器といへり眉公雜
字風蓬品字箋曰多編竹為之謂之風蓬

これ細代帆ありとまふと後せり

席帆 コサ 釋名曰帆或以席為之故曰帆席

多茅筵と引る者也

蒲帆 カ 蒲筵と引る者

筵帆 ムシロ 葉筵を用者蒲筵案筵の類也又月
在雨く餅の多ふ帆也

帆網 ホツテ 指和名敷聚云師說保都奈文選海賦曰維長綯
李善注小綯今之帆網也三體詩野飯暫維稍

字彙曰稍船舵尾今人謂篙師為稍子稍ハとと
はさたり和名抄系篇はさへきを本篇はゆる後人

書強る者又帆維蒙園彙 桅緯字彙 帆緯 經國 雄略

ま本 いづまそをさつらん風をさるるのうへすくみ人

手繩 テナワ 帆柁のたて此繩をつけて船へ引繩ひくまきり
さとの附この繩は帆を自中よまきり

新子載 おほみれまきのよあひの風をさるる人志多し人志多し

手繩

手繩根緒 子ヲ

両方網 リヤウホウツナ 帆の両方につけて船へ引繩船方より引る
是又帆を自中よまきり者也

服取網 ワキトリ 帆の両方網を引るもたての
下につけて引る

帆有引膜 ホカタヒキノメタ 両方網を引る帆を引る二筋を引る帆引の膜
あり又引る

といひり 素よかろりろのハ船のいも 綱也其繩と分る
かろりろの獲れとて ねは 蔓の獲と云へ

弥帆ヤホハシラ 表小るよる帆柱小名本桅也
明律考頭楫やうたしと後

日根ヒネ 綱 帆柱の根とて 分る繩也

弥帆ヤホ 帆柱ハ重と同一ハ帆也
くまひてろろの帆なり

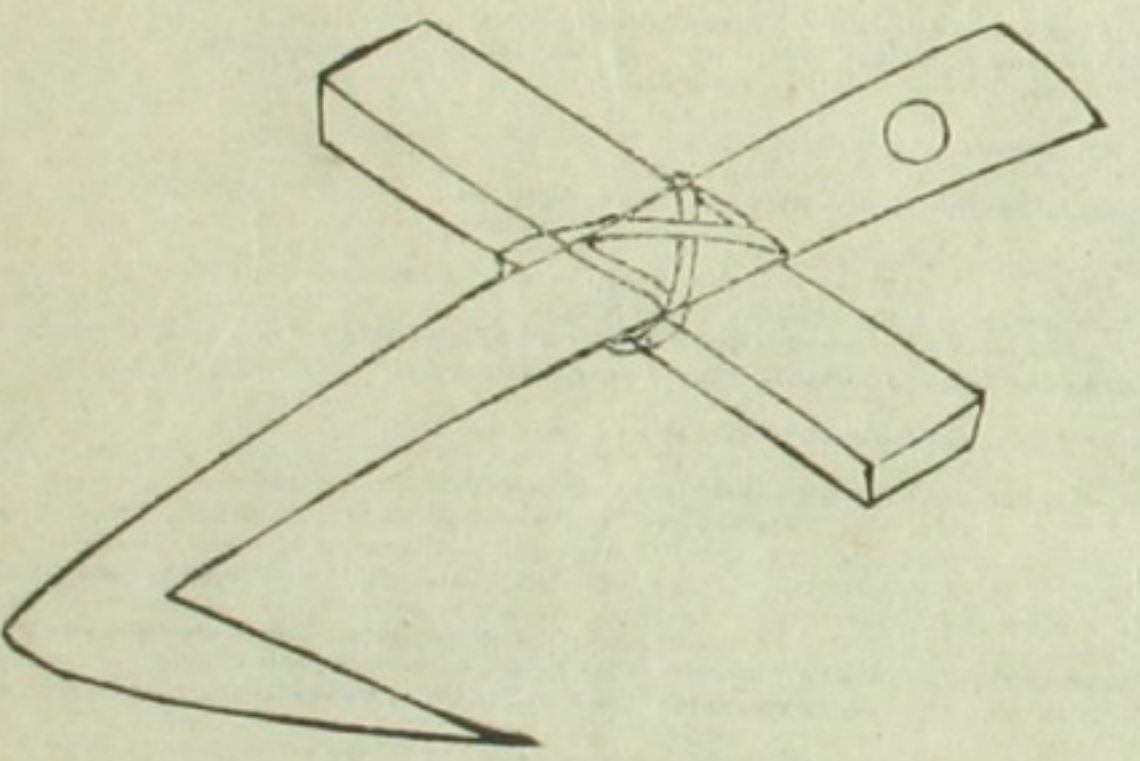
貫本クシノキ 重貴木と貴本へる繩

碇イカリ 和名抄四聲字苑曰海中以石駐舟曰碇亦作可
字彙曰鎮舟石也 磯曰碇石沈石群書 重石万葉

和名伊加利又艇掟 並武備志 古ハ石とて 用て
て今石と用る者本碇と云まらる舟のふとく

一角イカ 又と作り是石とくろり分る碇とさるありたふ
角又とて 唐人碇と作三才國會曰北洋可施鐵猫南洋
水深惟可下木碇とてくろり

万葉 大船のたぬふ海は ちかおしいうまてりも 我こひやまん



鐵猫

カネイカリ

鐵猫兒

正音又 雜字大全

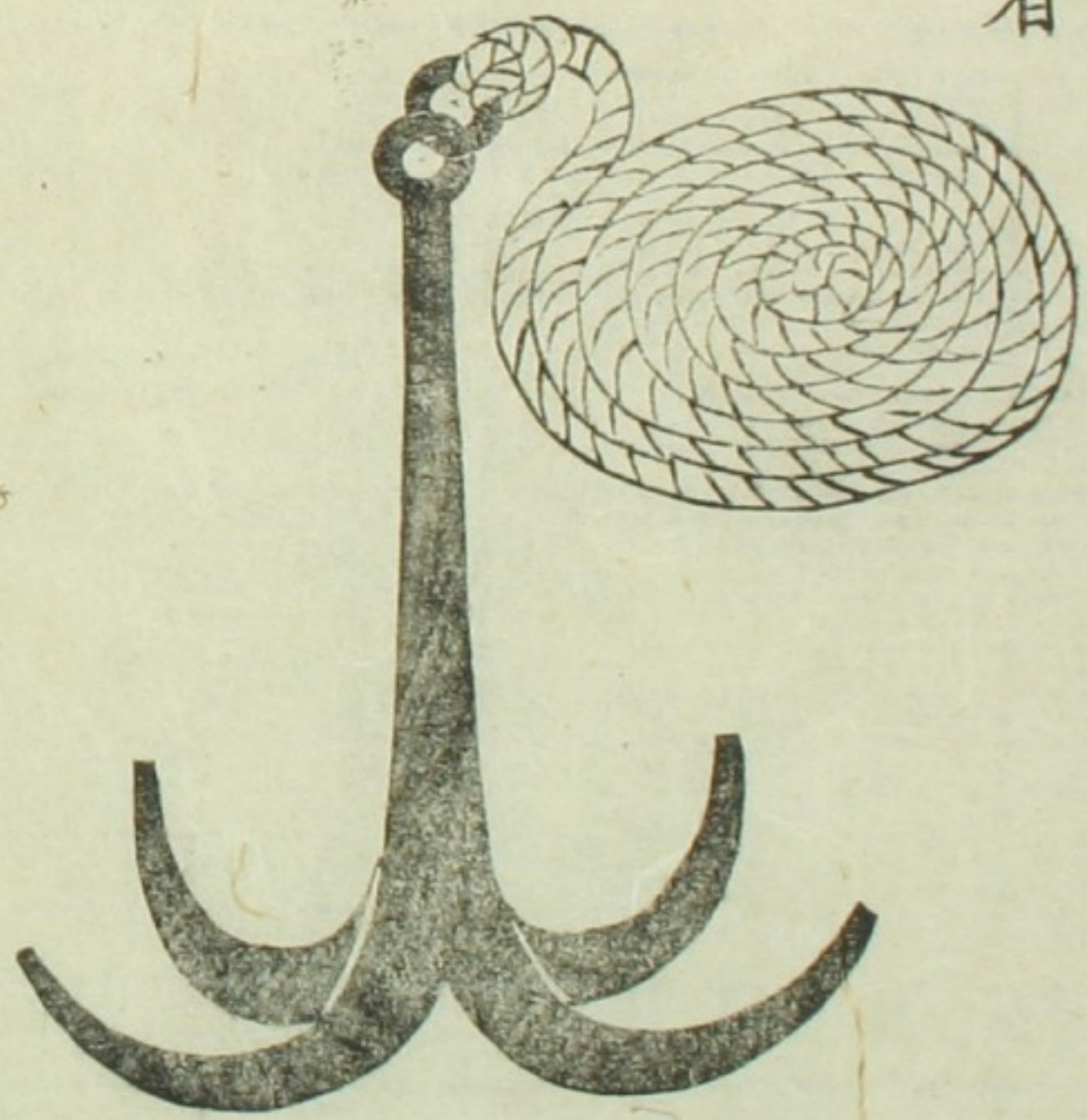
鐵猫

正字通

焦竑俗書刊誤曰船上

鐵猫曰鐵索貫之投水

中使船不動搖者



看家錨

イナニイカリ

天工開物曰凡鐵錨所以沈水繫舟一糧船計用

五六錨最雄者曰一重五百斤內外其餘頭

用二枝稍用二枝と又へしり

本邦千石積の舟は用ゑ鉄碇八頭其一番碇と云ふ者

重八拾貫目余也是則五百斤の碇なりこそ大船に

てハ重百貫目余よあよしり

碇者卿談 猫爪天工開物 起碇 下碇 下碇起碇武備志

藤垣草いかりのいかりおろはしりあろはしり

碇細

イカリ

蒙園彙編錨纜と云ふものいかりつかと云へし藤垣草
いかりのつかといふり又云ふいかりまはとよめり

於ま

倭いつあまは小舟のいかりをそとせし物と意をとりぬ

續後於ま

いかりおろはしり細はあそとも命のうきうたえしと云ふ

素性法師

錨卷 イカリマキ

トツタリ

錨下 イカリノソコ

引起 ヒキアゲ

浮纜

纜 トモヅナ

文選注繫船索也 繒梢並同書叙指南緯同船の舳は船の処の網也 雜字大全篋纜と云ハ竹索と云ハ名あり一 櫻纜と云ハ櫻桐網を用ふなり一

和名抄 度毛都奈

丈本

ともふとそそいふなりぬんか并ぬのそりぬのは

愚盛

艦網 ヘツナ

表はゆぬの細也中尾抜曰大船乃舳網解放也 艦網解放也とあり万系云のほは季吟曰船つふ舳つふふり也

万系

大船とへもともゆかめて一ころれさこへろふさめくと

牽絞 ヒキツナ

和名抄唐韻云挽船繩和名豆奈天字彙曰絞挽船網也 網也 緒同又百丈胡三省通監注曰百丈所以挽船

今南人用麻繩北人以竹為之陸游曰一以巨竹四破為之大如人臂又繪挽船筏也唐類函曰筏釋名云引舟者曰筏筏作也作起也起舟使動行也 纂文曰竹索謂之箝魏文帝詩負筏引舟中華多竹索と云ハと云へり 本邦加賀草細と用又竹繩ハヤ細と云ハと云へり引繩と云ハと云へり一ハ竹と云ハ小竹と云ハと云へり大竹ハ引繩と云ハと云へり海上一大船より小舟へ網と云ハと云へり引繩と云ハ引船漕船と云ハ川舟ハ

引柁と立是より付て陸へより引船也

新に於き

芦原より船波の浦といく舟のばあてなうも急いでるや

形ふ載

和名の浦またもふ舟のつあもふ引人けふみちもまより

性道法師

舟網

モヤイツナ

ハウカウ ケイカウ

船網 繫網並に同後を平洗模相と云船網左右より細

也藤垣まむむおぼよ小船ニそくもそくもそくもそくもそくも

と云なり又小舟ありねともくも合さる也又りやとも云也

同事なりといひ但是ハいり世俗ハハりやうと云也と云せり

舟と船を合さるふかきなうとそくもそくもそくもそくもそくも

又むもわう通者にけりもはくもなりなうも残り残り残り

よりハ残りなり

弘安百

むやわさう油のつれれ船をくそ海士の女舟りもくくれぬ

後船名

史本

くろのまき舟の舟おむおせし船屋より一のまのうけより

後成口

日

みうれやうはこれ入はまきあハ船をそりくふりぬの法

西上入

遺子

ヤリテ

是ハ舟と舟のわの網也昔網の細網と云くわりの舟へ

まけやの舟へやりてと云又よあま

網糸

ツチヨセ

大網を引よせくろ細糸也

或ハ小え緒と云あり

万力

ミシリキ

同根緒かきの付く網也はたよ又

かぎの緒と云船の上より小舟の舟

捲込網

ミキコミツナ

又捲込網とも云

絞車座は用者

傳間込網

テミコミツナ

舟船よりあけおろしと云網也

口を或うりいと云鹿掛網あり

牂牁

字彙云戰戰並同師古曰牂牁繫船牂又處名也

楊升菴曰牂牁今貴州地也其江水迅疾難于濟渡立
兩牂於兩岸中以繩組之循繩而渡予過其地見盤江與
崇安江皆然又華陽國志曰楚襄王使莊蹻代夜郎軍至
且蘭採船於岸步戰滅之以且蘭有採船牂牁處故名
牂牁下學集找机楸三字義同和名按曰找牁唐韻云所
以繫船漢語抄曰和名加之

万葉集大船より之よりとてとぬきよたまりふのうら
やうりせまー治まかーとハ舟つあく本也又
舟とて可志よりとていなりきとあこ江乃とぬへまき
くとぬりも治よ見安云本と立て舟とほあくとかーと

とて季吟曰數聚万葉ハかちと云と述するや舟つあくへまき
小大木と指と下振とてと述又あまをとてと神とぬわれてと
舟の可之より治まかよふけなんの治よ季吟曰可之ハ楫也和名
かとらも加邊と訓す上右ハ假名つくひさて字とてと述也といり
愚案 此二首ハかーのことと治とことと可志と數聚万葉よりち
と述するやとまて治せらふまよいり可之と述るを楫と治
和名加邊と訓するは治せらハ知若子魚の一失をらんふの公もこ
首たかーのこくきと治まの二首ハ波はぬれとて舟は夜乃
ふけぬの治まかーありてやうりへきと述る之今加世と云あく麻原
とまーせ通者也くせとまより大本の長きを川中よりゆりこ
ぬとつあくと云又經本名ハ楸と地かせと云

飛繩

舟つゝあつかせとち油とち波の上の舟はつゝあつかせし

政お

カケヤ
板撃

地うせと
お者

アユニイタ
舵板

正字通は曰俗舵の字或曰舟舵ふ泊は舵とちること大
くりは板と船の首は舵と接して往來と通は
とてへり是和舟用の舵と同一

艇板

徐氏
筆談

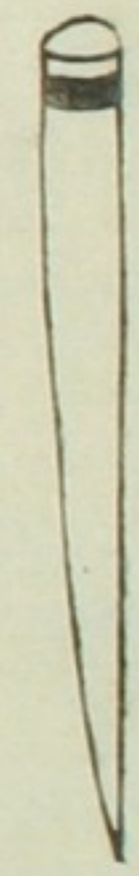
跳板 数書
纂要

獨木板道

宋王陶
終陶

一本脚道又獨本

板並舟の板を平化はよ木の板を引渡といひり今も板
とて又板は瀬舟とて神主板とて

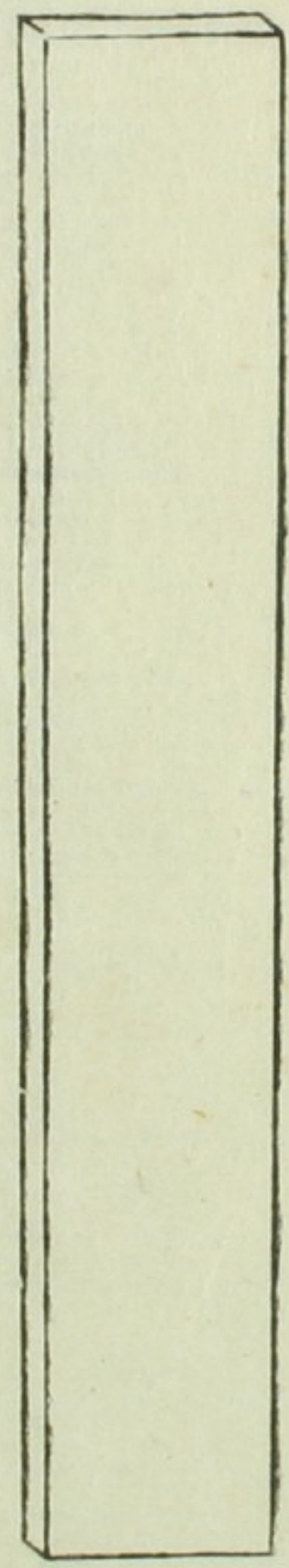


ナシハ
南蠻

奈無波と云四字下略也南蠻車也苦緒は舟の

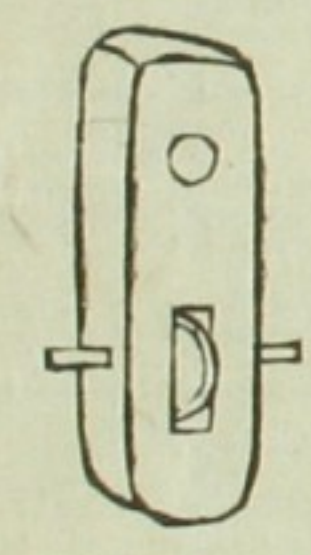
者ニツあり上南蠻 特鼻南蠻 根南蠻是と根

舟とも云水繩南蠻ありとて網とて舟に用



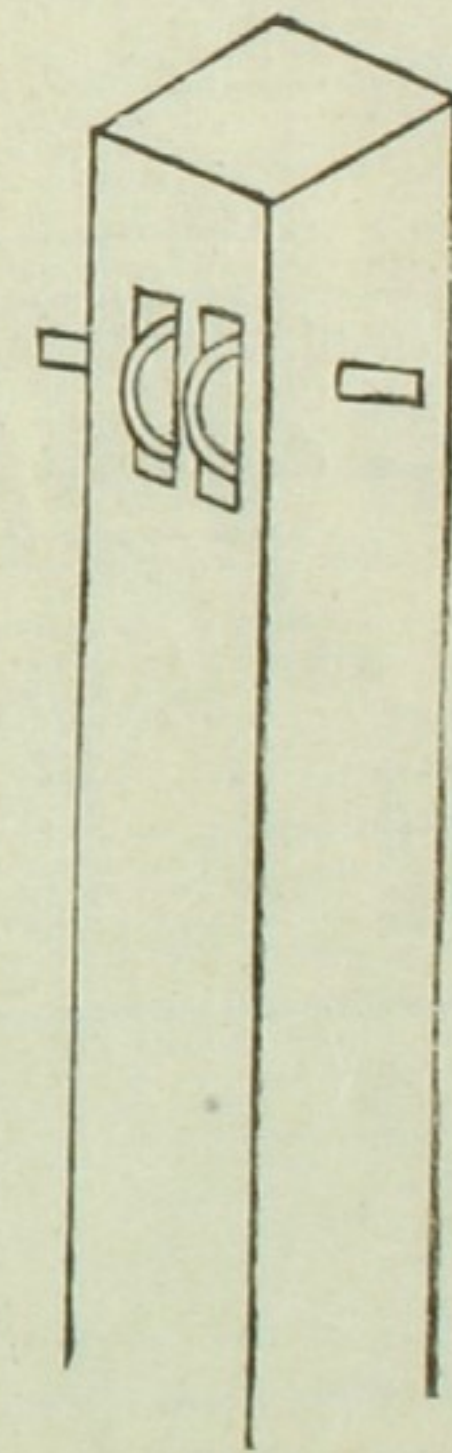
トヒクル
飛車

水繩下よあつと板取の車と云其亦所くよ並な飛車
とらひ或ハ表つとつと総標と云又飛車と云



飛蟬 トヒセミ

帆柱の撥は四明律考位セミ轉と云是也小船後車ロクのか
ころは用橋と云水繩と云を舵と云其用不少
車のまま本と云ことと云舟の方言なり



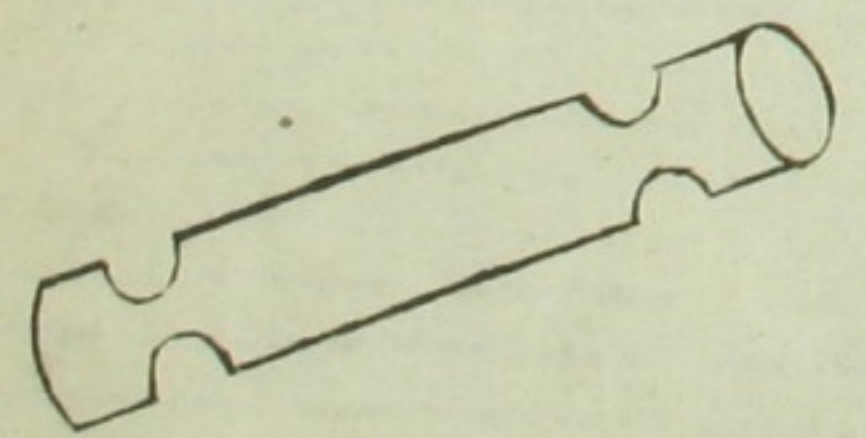
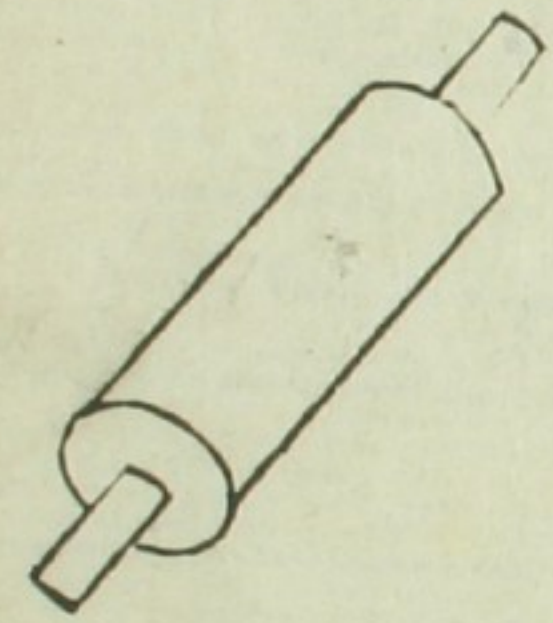
胴 トウ

老胴といひり圓轉木ころは一也車立棹指天の車
と胴と云蟬並鯨の車と云らと云舟の方言なり



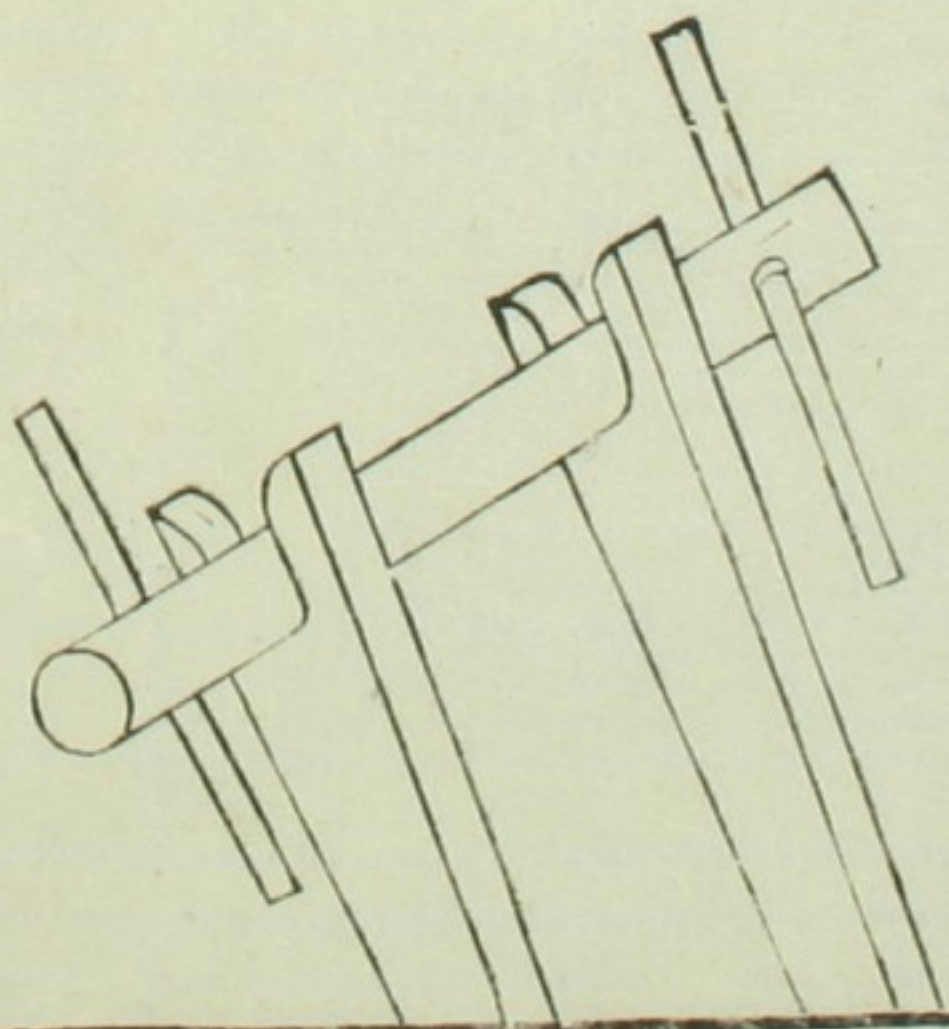
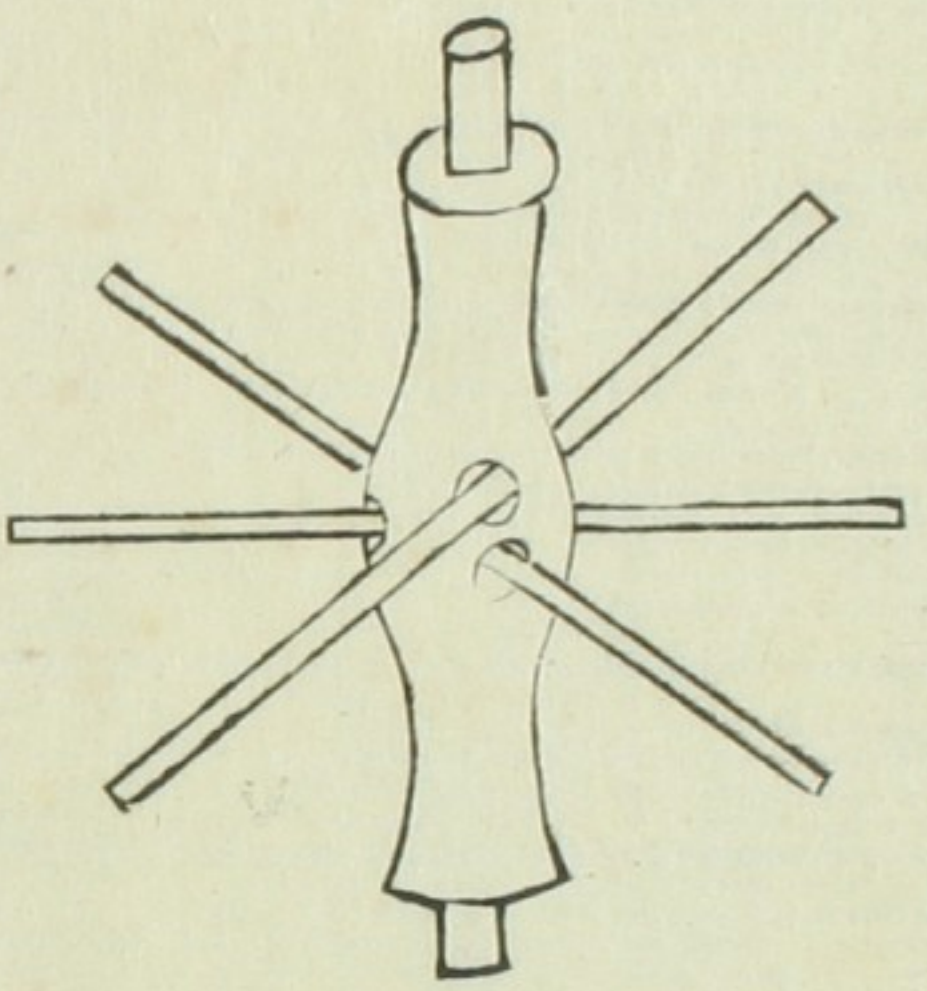
轉轆 ロク

和名枚四聲字花云一圓轉木機也俗云六路又蒙
圖彙より一ころまきと別して号するぬハを胴の類
也是圓轉木機ころは一と云一合敷節用より一名
轉軀又作機檻下字集和名枚みふ聲を以て別と云
云ハハころまきなり俗云六路と云ハ船也一舟方よを
込機機と云る者方々の細を後車座へとの是と云
是より俗を込込也又お込と云



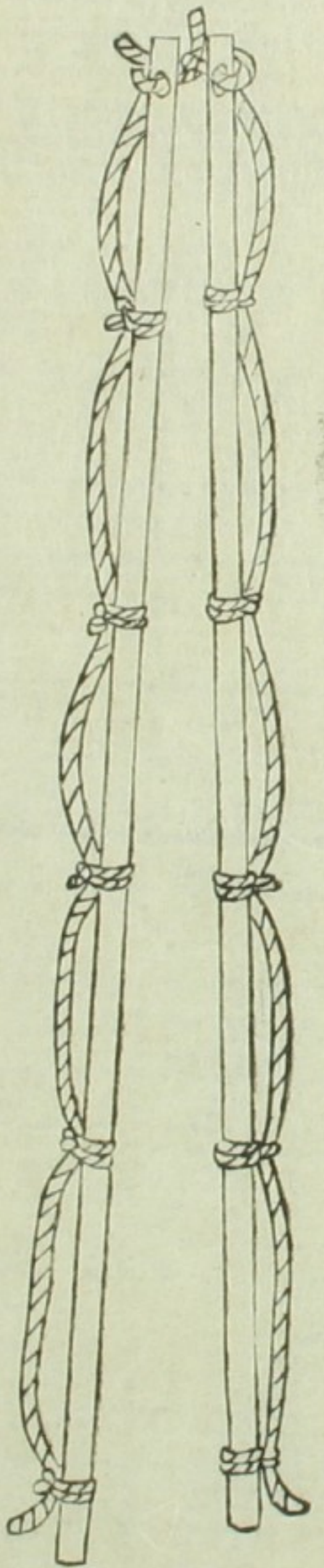
絞車^{ロク}

雜字大全 蒙圖彙等ふ載より和名抄倍云云云云と云々
ハ是也船の舳のりたちあり絞車座と云々舟方より
と轆^{カク}よりと云々繩と云々胴^{ニク}紐^{トウ}よりと云々樽^クと通^スて
扱^アり押^オり扱^アる云々橋と云々帆と云々座と云々あり
艇及石物上下皆是より人力のおよぶるきふあり中
船以上は用薩摩と云々神樂山と云々



車^{シヤ}知^チ

舳表の車立筒按以上三所より用繩と云々胴^{ニク}扱^アり
樽^ク二枚と用^スりて紐^ニより扱^アり又中船^ニより用^スり
ハ胴^{ニク}よりと云々

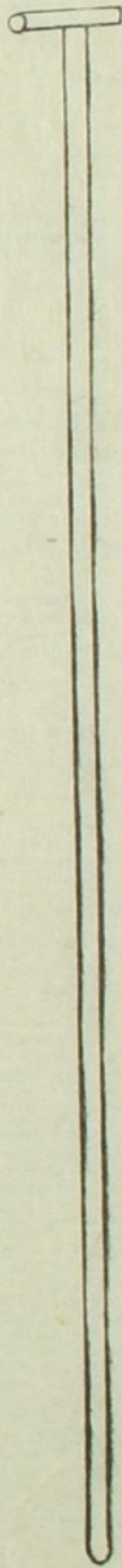


番^{ツカイ}

合^アり船^{フネ}よりと云々と云々合^アり船^{フネ}よりと云々
橋^{ハシ}よりかけと云々と云々船^{フネ}の細^{ホソ}抱^エり又大船
ハけ^アりと云々あり水^{ミヅ}棹^{ササ}と云々と云々

水棹 ミサホ

云母よめり水引棹の中略也雜字大全蓬竿と有る
 とは舟なり海船倭舟の舟ハ棹は用毎八番又架七
 筵と有る也小舟棹長水棹と有て有り或ハ棹と有る
 也莊子曰顔回問乎仲尼曰吾嘗濟乎觶深之淵矣津
 人操舟若神吾問焉曰操舟可学邪又揚子曰人有濱河
 而居者習於水勇於泅操舟鬻渡是舟とあやつりえり
 ？のとも也列仙傳曰薩守堅至渡無操舟者拳篙自刺操
 とすハ是等より出るる操の字みえんとて棹の字に
 水棹といふともは誤るるハ一水棹ハ獨操ハ棹とて誤る



仍義心と云ふハ是と云く棹り

新六帖

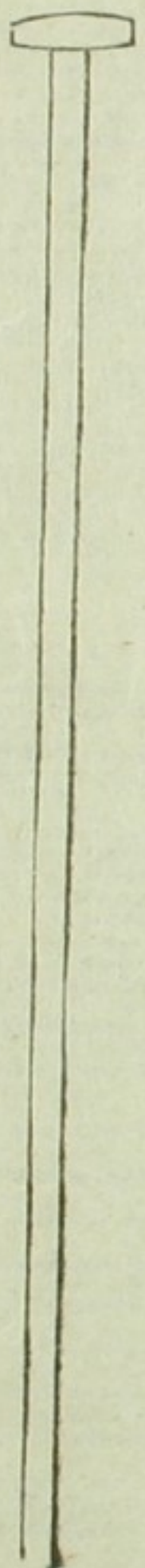
舟志亦きふはありぬとて船はとるなるぬんぬと云

夜登内大原

棹 テサホ

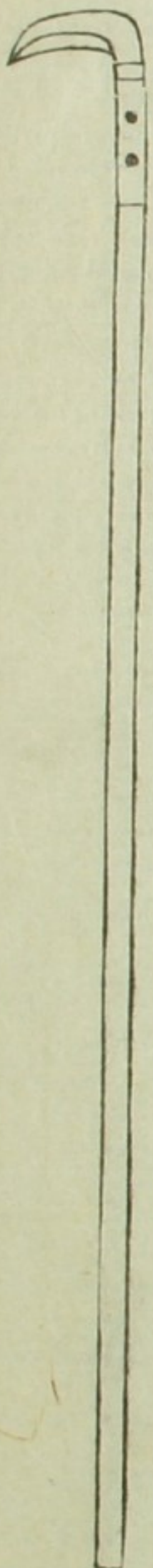
薩埵婆は船のきしうふ舟方よりさしとる

ありと注せり物とけり者也水棹ハ船の大小より
 て長短ありハ棹ハ寸尺空りハ大なる也



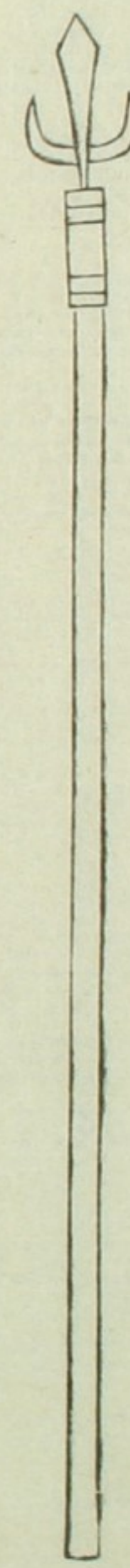
藻切 モキリ

後を平池藻切を拵く後之紐を切拂ふといへり或ハ藻
 ちり芥ちりと細よかりしる物を拂ふの具也倭志不船上の
 利器藻藻と云ハけた也



鏢

武備志船上利器也中より梨頭鏢小鏢あり
本邦鏢と突し船に用る者も一本八用具と云ふ也鏢と
呼ぶ舟人の曰はしを指し惡毒魚を以ておそれし又ハ魚
鱉と突え此用と云

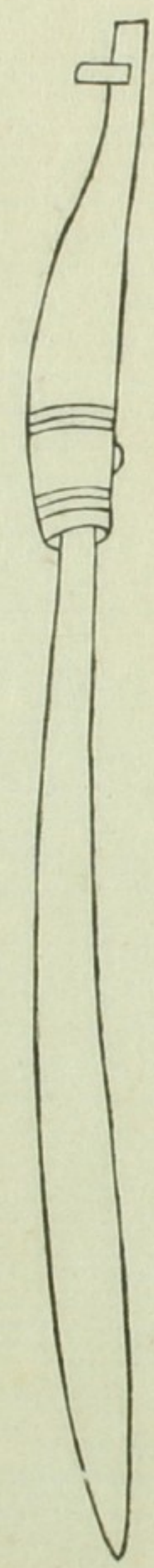


艫

和名抄唐韻曰所以進船也與魯同擲艫楫擲並は同韻會
云繼曰擲横曰擲蒙園彙擲と云もろと列し擲と云もろと後
せり字似擲長曰擲と云へり軍書等擲又杖と云也擲と
又くの下は云へる小名
擲脚 雜字大全は擲と云へり
今擲の字も云へり
腕 柄 違繩 上下ありさきたる
ありたると云

夫本

と云ふはもろふも程たりと云はれり
かとの村



棹槽

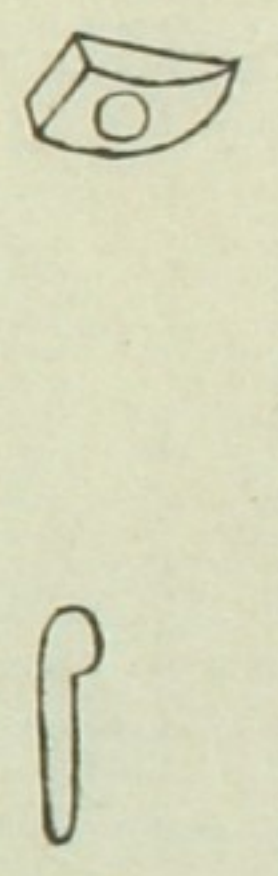
今徒て用らぬ終りたる者と棹擲と云ふ又擲擲と云ふ
と云ハ擲と押すの名逆擲と云ハ擲とたつる名也合
數部用は逆擲と云ハ部風は所用といへり棹系逆擲の流
軍船の舟よのん

夫本

かゝる押すと云ふのふり此は舟のまはり乃秋の夕暮
日 さうり押立石碇のまはりみあき垣あもかりりなり
西行

櫓 櫓杭也。雜字大全。櫓柄合類。節用。櫓樹之字。ハ也。字彙曰。櫓。櫓。用以兼擗者。其形似肘。故以名。櫓。蒙圖彙。ろ。不。そ。と。後。せ。り。

櫓を用て仰り擗床よさしこも擗のハ子よ合せて擗さうら者也

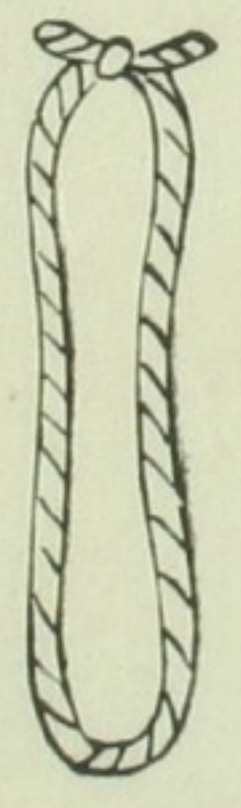


緝 ^{ハヤラ} 楊氏方言曰。所以懸擗謂之緝。注曰。擗頭繫索也。是。和。名。こ。や。と。さ。へ。一。去。れ。も。ろ。こ。う。の。遠。あり。漢。く。も。擗。

擗 擗楫。楫。こ。う。ち。か。う。一。同。方。言。は。楫。謂。之。楫。或。謂。之。擗。注。は。今。云。擗。歌。依。之。名。也。と。又。へ。り。是。棹。擗。を。り。藻。擗。ま。い。や。と。ハ。海。よ。つ。く。れ。と。る。も。な。り。是。亦。よ。よ。め。り。され。も。い。ま。こ。云。と。又。と。注。せ。り。又。紡。績。と。云。紡。績。の。と。や。と。う。て。同。名。矣。お。擗。の。既。又。つ。け。る。繩。と。さ。ら。ハ。水。也。又。早。緒。と。云。早。緒。よ。て。仰。上。下。こ。て。繩。上。と。う。り。繩。と。云。下。と。根。付。と。云。

夫木

又。有。取。よ。と。や。と。の。つ。か。く。ち。と。て。擗。ひ。う。く。亦。そ。あ。や。う。き。小。は。匠

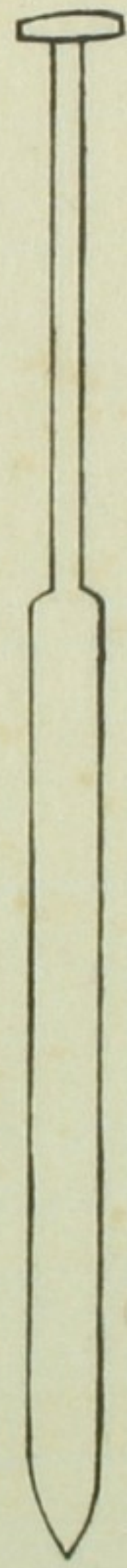


擗

字彙曰。進船。楫。在。傍。撥。水。短。曰。楫。長。曰。擗。韻。會。曰。前。推。曰。擗。後。曳。曰。擗。縱。曰。擗。橫。曰。擗。米。是。よ。て。別。へ。一。

前へ押す將ハおろし也。後。曳。擗。ハ。か。わ。也。後。又。押。は。者。を。擗。也。揆。よ。押。す。者。ハ。お。ろ。し。也。和。名。抄。叙。名。云。在。傍。撥。水。曰。擗。擗。於。水。中。且。進。擗。也。漢。語。抄。云。和。名。加。伊。万。多。よ。賀。伊。可。伊。ち。か。け。り。又。玉。纏。の。小。楫。と。後。り。結。不。蘭。梳。畫。楫。滿。長。川。と。化。さ。り。楫。ハ。釋。名。曰。使。舟。捷。疾。也。兼。名。苑。曰。一。名。梳。和。名。加。遲。と。い。へ。り。万。多。桂。梳。と。よ。め。り。

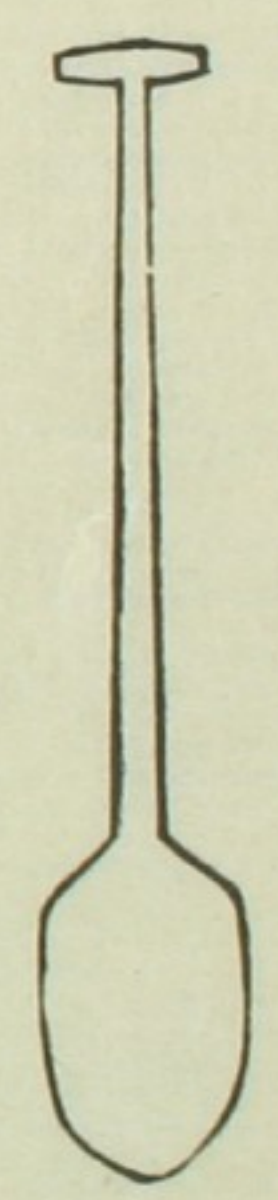
為舵字諺乎といひ又書ふのさうといへとも海舟を掌く
 ふうくは續日本紀文德實錄棹とくちと初に和玉篇小舵と
 といふと船とくちと海舟のまゝある下學集船用字概の
 字と事船具と概いあかせたり書ふのとてなは海舟の
 外船概とては船底の穴を船首のせとて五車韻瑞は
 へり賢賓王集の輕舸本蘭棹揚泉五湖賦は亦棹為
 權詩の竹竿篇は檣楫あり是皆くちなり今船權
 とてくち者棹を用楫櫂マテハレイをく用くと貝系
 和本叫くとも載られり



伊勢物語 我くち舟家そおくち天の川とてくち舟れくのちのくち
 業平の巻

舟カキ 舟概は玉纒の小概とてめり藤垣まよとちうといひり
 字は在傍掬水短曰概又前推曰槳縦曰櫂横曰
 槳櫂ハ櫓床ありてたては押し者なりおちのハ小船は用
 船舵舟繩とてふふくくり是は通一たたのかさくまよとて
 みくく船舵とて舟とて棹はあを棹あおして船を
 ちる者也韻會の注せうくく一とくれハ概楫槳櫂棹多ふ
 おちのとてくち一船のおちとてまよとて楫とてくち一とて大也
 九ふハ川は用て海中は用れはちのハ海江舟舟
 ちとてくちなり一武徳志の盪槳とて論語の泉盪舟盪

ハ陸地ハ舟ヲ行セリ也ヤリ乃ト云々軍書ハ槳ト云々
後セリ也ハ舟ト云々今遊艇ハ用又云々山川
深舟ハ用云々



日本

ハ川ト云々ハ舟ト云々ハ槳ト云々ハ舟ト云々

衣笠内大臣

橈

百葉及和名抄曰依手唐韻曰槁亦作篙句會曰所以進
ハ舟者棹竿也方言云刺船竹也字彙曰篙刺船竿也
合衆節用持楫選篙雜字大全撐橈明律考竹篙とあり
川舟池と海リハ舟ト云々ハ舟ト云々ハ舟ト云々
ハ舟ト云々ハ舟ト云々ハ舟ト云々ハ舟ト云々

和名

川舟ト云々ハ舟ト云々ハ舟ト云々ハ舟ト云々

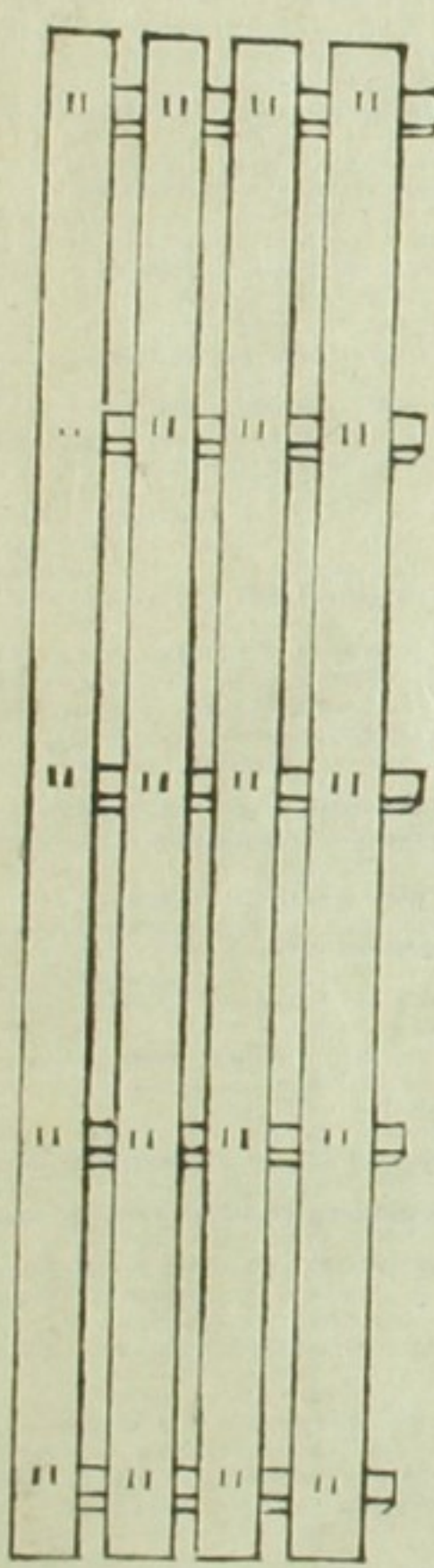
輔仁親王宮

推橈

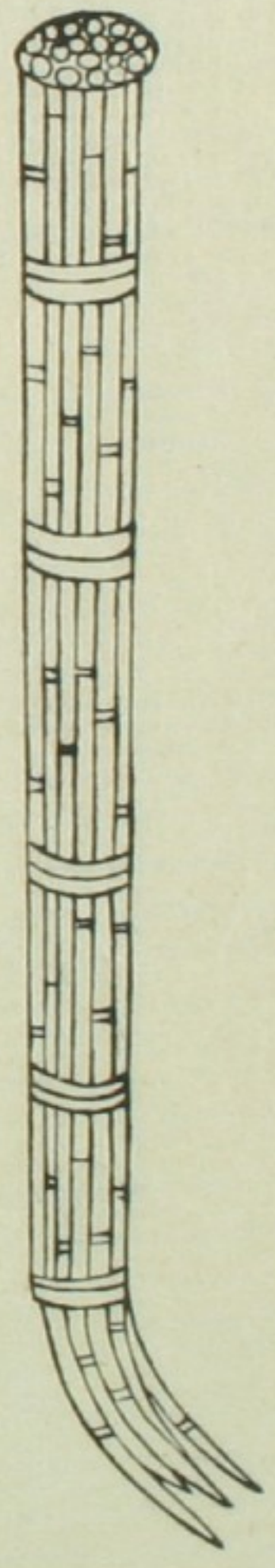
日本紀又古語拾遺ハ推篙と云雜字大全篙推
トかけリハ雲所抄藤原氏又曰推の舟ト云々

篲板

海舟舟浦の上ト云々板川舟ト云々ハ舟ト云々
ハ舟ト云々ハ舟ト云々ハ舟ト云々ハ舟ト云々

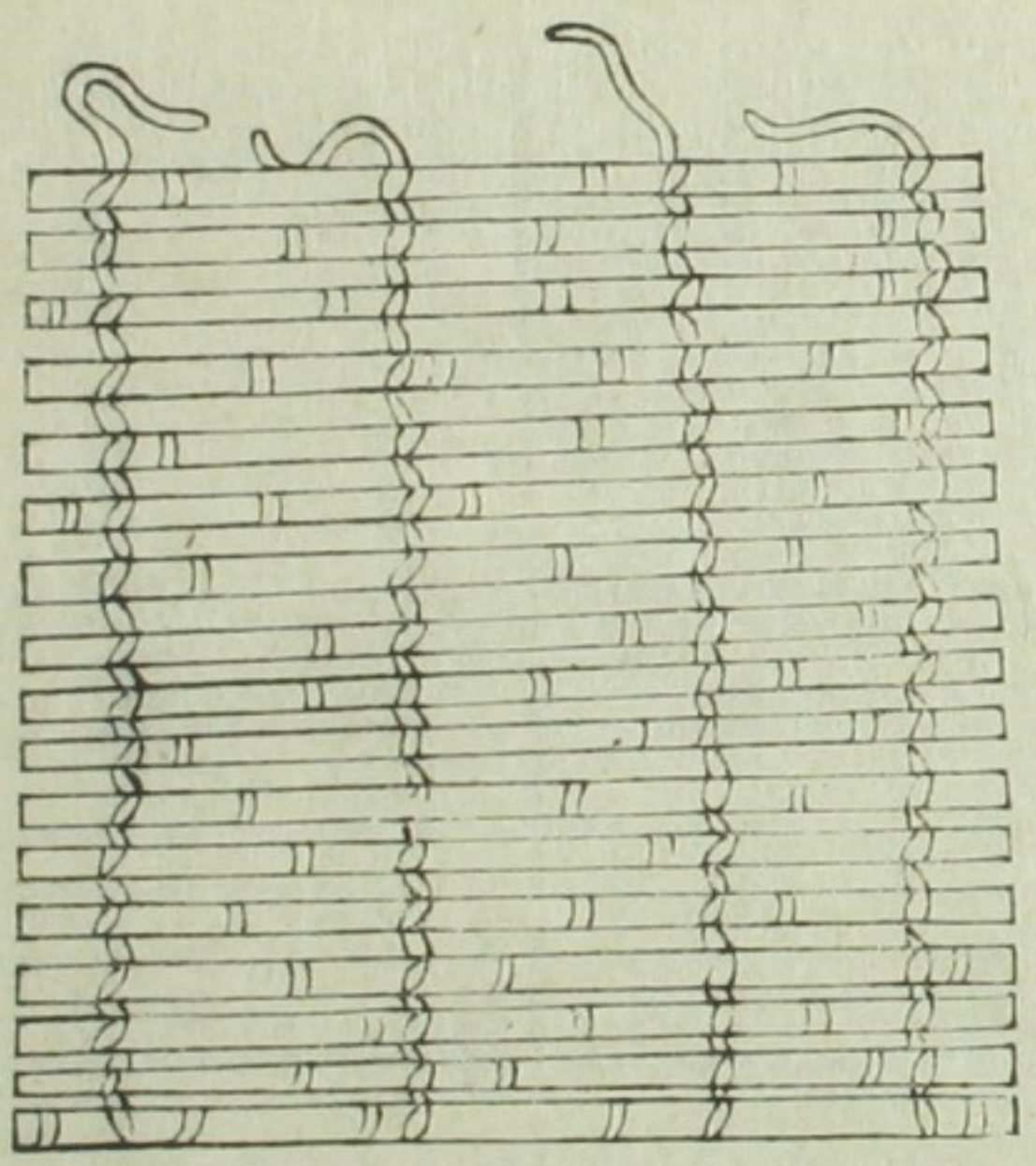
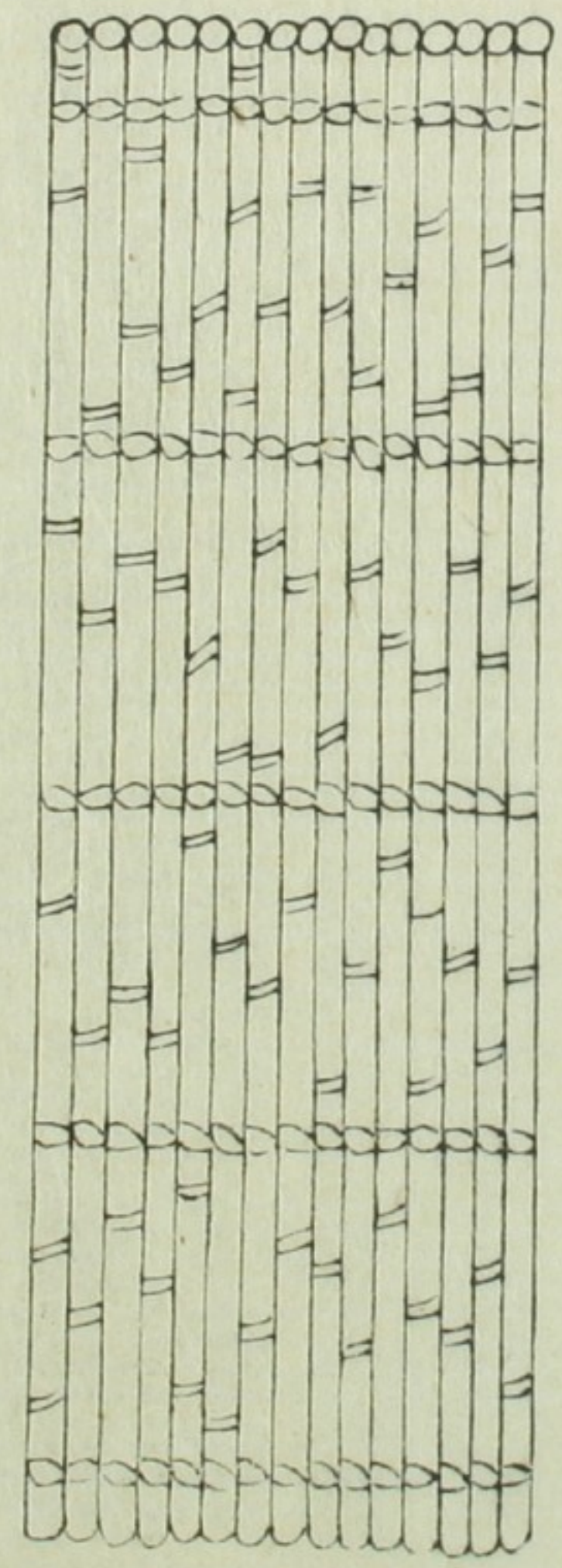


不て
 字未考竹箐の下は浦者船底とも河浦とも
 りみ川舟木を引くともるを船底とも海船
 廻船行を把てた名の船例は浦を不てとも八雲所抄藤
 極まとも不てともへり

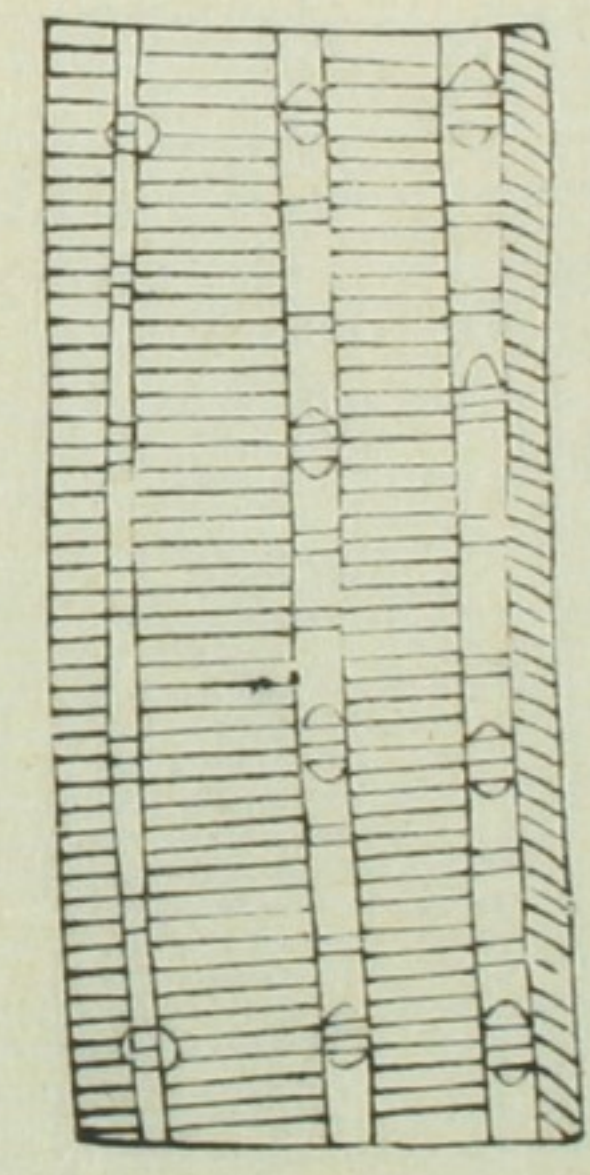


いき箐 字未考廻船を積下ふ舟竹箐也船底は由く
 舟板生箐ともり字彙は曰箐は舟中箐箐慮といふは
 舟の底に
 タレス 舟竹箐也下ふをいきてとも廻船を積下
 舟の底に

箐



ふくさひ
 八重津抄曰ふくさひハ船ははくろく者也愚按船
 の箱よりなる者あり藤垣者ハ海舟よりなる者
 いろいろ今蓋をこもをも用く行はてをこもを長又六天
 程つよこもろくたの箱と云又箱をつもをたかへ立
 浪をよせく故荷棹とさるる小船の浪よけ也



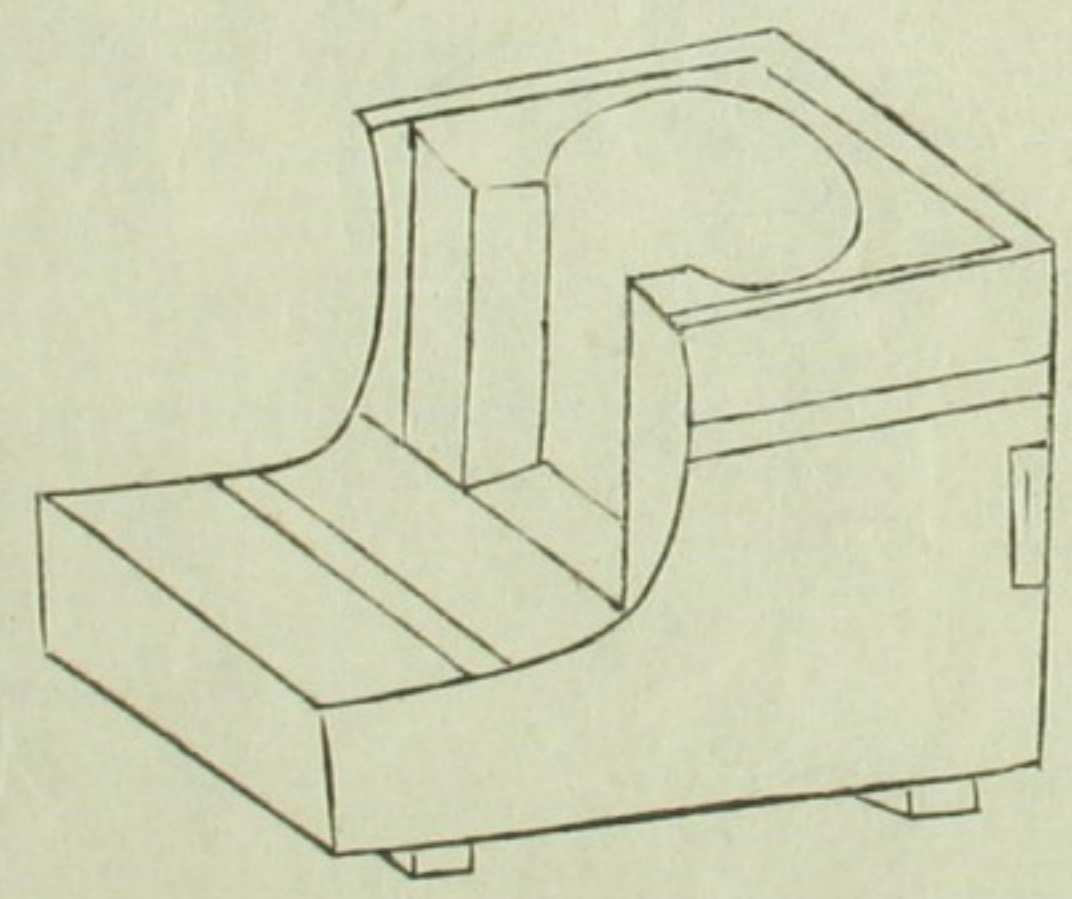
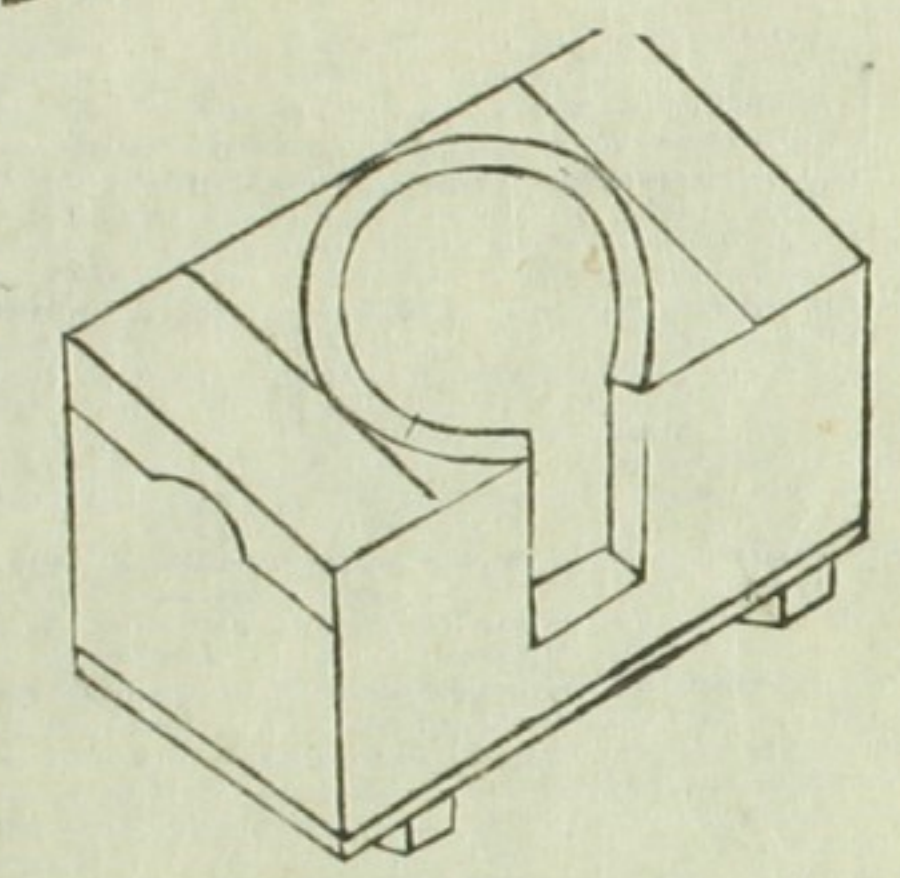
夫本

ふくさひそかくへうろくろ波舟舟の浪よけを稱れね

徳園法原

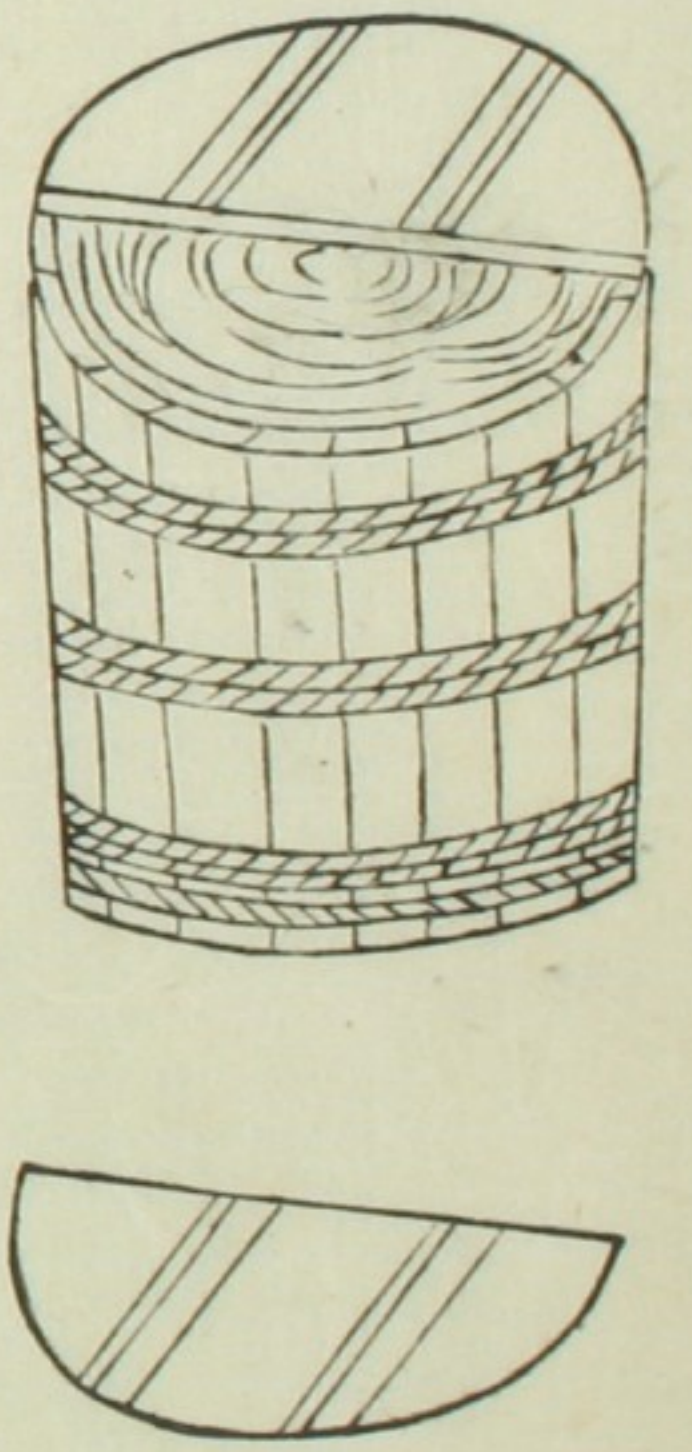
湯庫^{ドウコ}

箱は銅の竈をふせ湯をまうす者是と一と云
 或ハ銅をまうす又銅よりて去と以て湯竈とす
 と火床より大船ハ竈又ハ圍爐表あり



水樽^{ミツタレ}

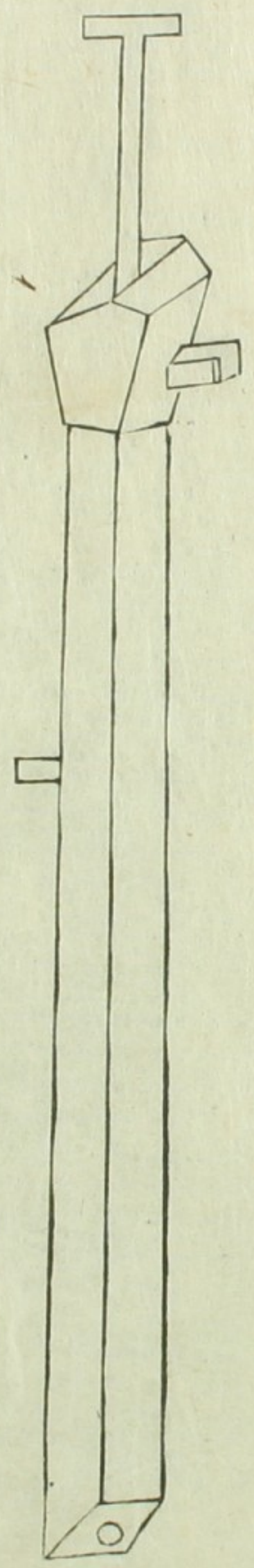
指水樽と云水挿也雜字大全水櫃と云水樽同
 又用又いつれの船も水と貯るに重なる也是を
 水樽と云つたの字獨字未考



スツホン
舟

和名類聚ニシマウハク蔣勳切韻曰舟洩舟中水之斗也和名由土利字彙云舟中掃水器洩同字注曰此字本單作舟舟中滌水器後人以其滌水遂加水又拒同舟斗去水斗也雜字大全又舟斗と書蒙圖彙又舟のつとんととハ恐ろ今まのつんとと合類并舟斗とつけたり又川舟よてハ小すくひとあり餘飯扱ありみまゆとあり也舟斗と架して餘と取ると

の舟へとも 桶と居舟とも



於此也 彼海にいづゆきくくひ桶もとりあへんたりふくろ 下畧

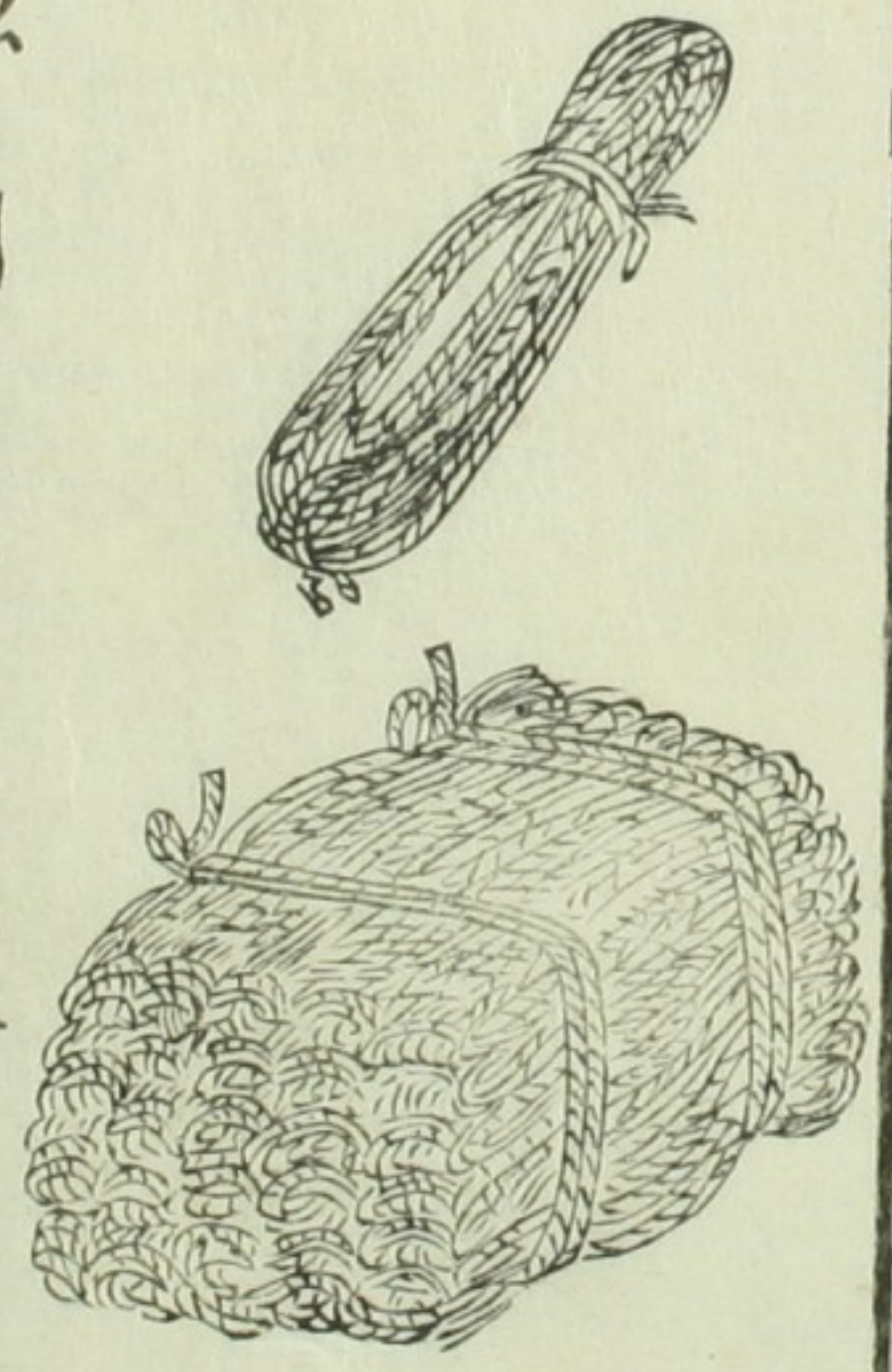
ニキハタ
衣細

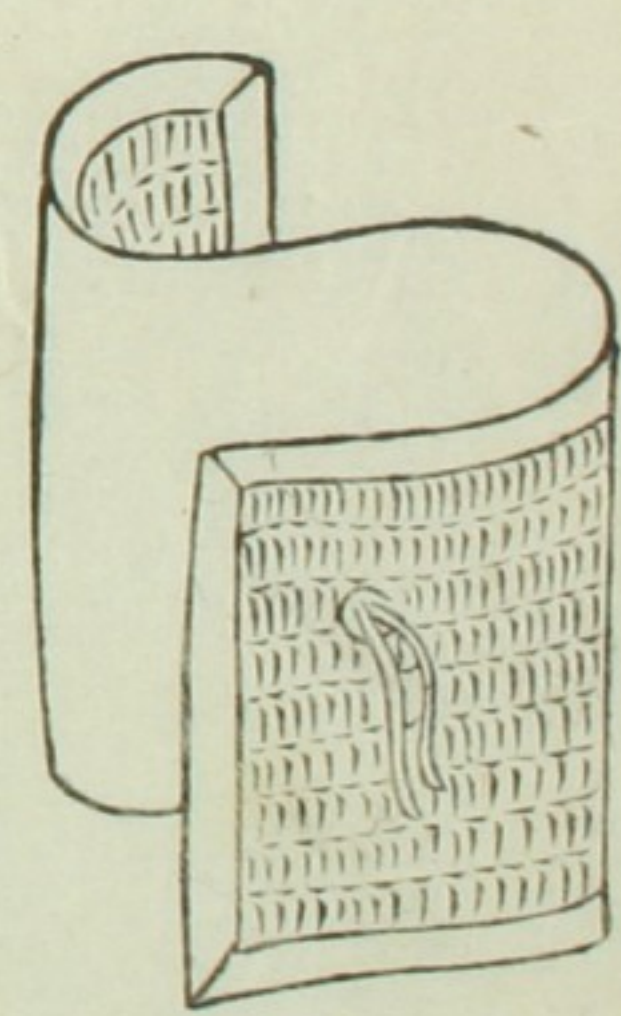
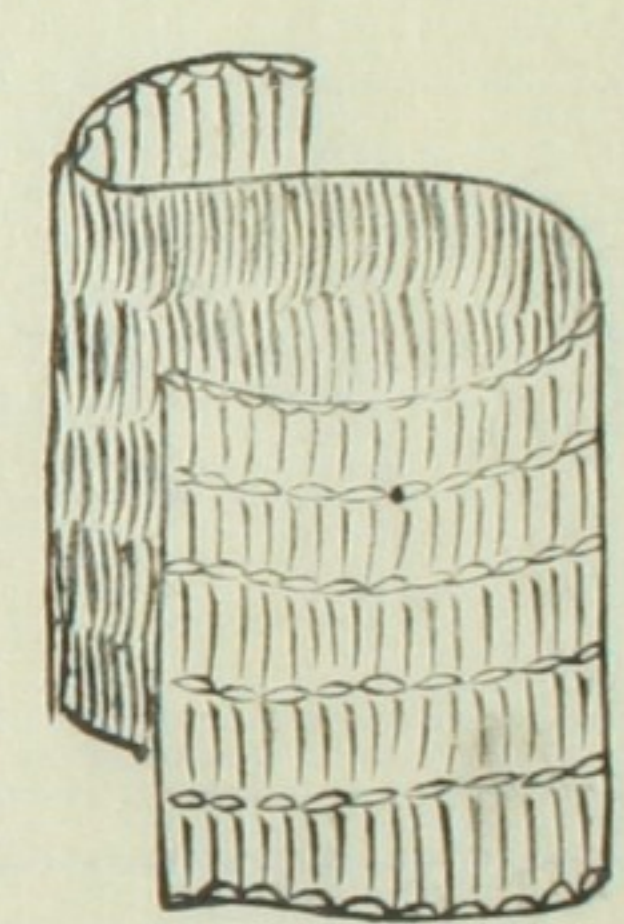
易既濟曰濡有衣細和名扱云周易注曰衣細亦作細所以塞舟漏也和名夫袷乃能米

今のとと云こめ通者也雜字大全塞漏といふり又字彙曰絮縵所以塞舟也又竹茹以塞舟也刮取竹皮為茹と云へり茹打とすてのと打と後糸糸のりふと云

うのつ別は漢は竹繩を用也と云へり火繩の類をん
 り其以來中華も竹如の用さるや明の茅元儀氏備志
 は日本の船舶を治せるは不使麻筋桐油惟以草塞罅
 漏而已名短水草といひ 本邦如くはと云へり
 此古より茅を用ゝと云へりときうど今松皮繩を用
 又竹如の薬の名何處氏の書にまへと云へり
 短水草 或は志船如千金方 敗船如本草節用は糸の
 こゝと云へり 魏家の貝系和布まは短水草と云へり
 如と云へるは羅漢松の皮也船のすきまをふさぐもの也といひ
 羅漢松は松の字を用松皮繩と云へる松の末は皮を用ゝは
 繩也松皮とてはとと松皮繩と云へり以舟の治と止と也

解トマ 族同船は用とまは字を用今蓬台の字通一
 用和名抄るは廬の上は元船中管と用とす
 といへとも麻形と云へるは小船なり又や名の如は元字
 景は曰竹と織る若と編て船と覆也 本邦茅草
 の系を茅のその布を編るは毛管と云へり
 舟船園船は相仲管と用蓬をぬきとてくは繩と
 名と云へり





夫木

こゝろとまもろいしてまうちとてはのさたといつる白布

九条四丈

幕

河海樓船御座船は用圓形小早等垣まゝり

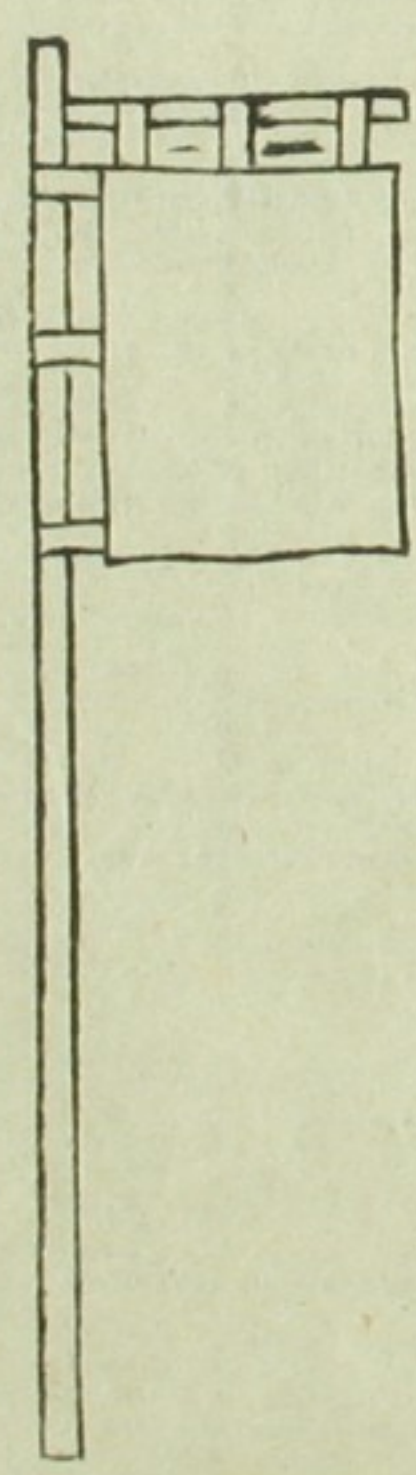
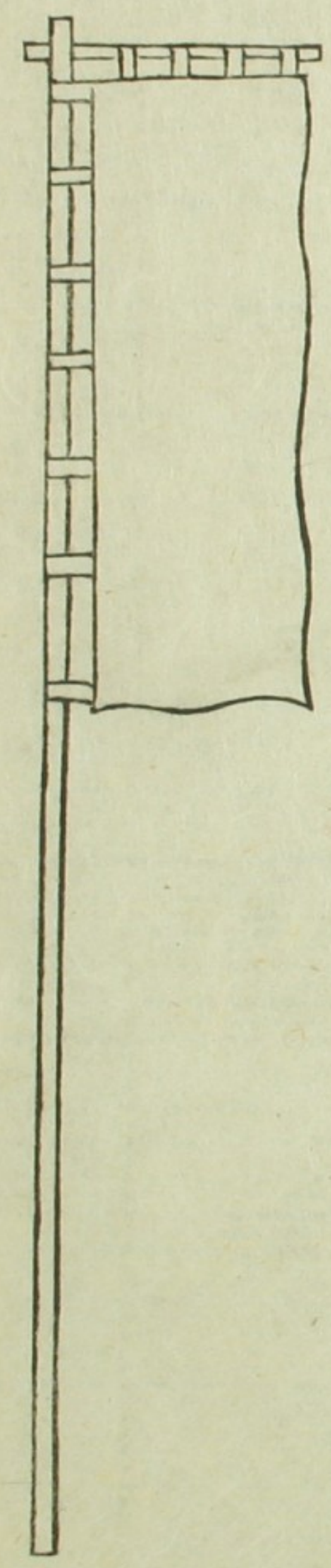
字彙に曰船ハ舟帷也ふまゝく也座形尖舎よりを
幔幕を用日霞は張と天幕と云小船の座形中

まゝる者帷幄の

幟

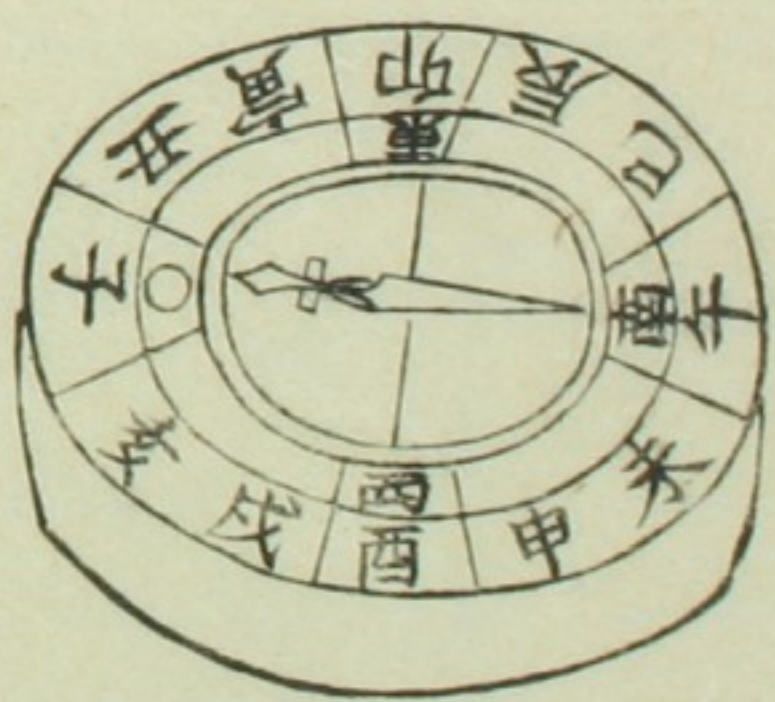
日布純に旗幟皆整飾とあり委しく舟飾之

部よのれ緒候を夫士者定む舟印あり或ハ吹奏
あり幟の小と小とと呼商船は多くハ何れと云舟
名をあらゝ又ハ定紋合下を添込用て式日必立
是別禮儀あり



磁針

天工用物は於解舟の製度度といふ其首尾は
多し者羅經盤を安んずる以て方向を定む 舟中磁
針を用くは或人の曰
海船必是を用く北斗を
察して以て方隅附列を
知る蠻人呼て羅經板と
名と云ふなり



右用具の外三社に神棚あり又住者大明神舟玉
神を安置し神佛其船主船頭の位と云ふは依り
初傳に其余は忌放日用の道具等ハ家屋に用
ぬは同くれを悉不及記

細類之部

テグス細

天蚕糸ハ檣葛刺國よりか虫みく造ると
又くより蚕の糸ハ一説云なりといふ強
くは髪細はまさるといふり物の根端は用又筋と云
是を用くはさる者也

髪細

人の毛髪を以て作る者延る時ハ風は強て是く
のび又かきめくちむといふ

は故に繫索細は用くは危難を救る一の具也

櫻桐細

本末は曰其皮は一年に三四度ときぬへ
是くは其皮を以て作る者其皮を繩に
水を入るくちんちんといふなり今も水細は用

ツグ網

貝原和本州又曰ツクの本琉球より薩摩の國
又後々梭桐に似て其皮ハ黒くちあろりの皮よ
ア長し船の綱として數十年とへくも朽ちぬとい
り今多く飾に用水押の飾燈又ハふくさひ等ふ
貝赤ツク黒ツクの二品あり

蕨網

同和名草は蕨の根とてその根を干し綱と
いふ云々云々して久きは堪といふ是を綱と
さる者多く川舟繋綱陸網は用海舟とも何
是をシツラと云

加賀草綱

或人曰為綱繩不劣於鐵線故名鐵引大繩海
船綱呼加賀草と云云草綱の言と云る者也

苧網

オ大繩為破網海船必用之具以亞加賀草とい
り加賀草ハ其色白苧ハ其色黒也

檜網

檜と云はる者多く作今多く梭網に用是
とスクリと云以上のとツ今廻船者用く船道
具附は是をの具

ウツラ

梭桐とか賀草と云ひませく繩と云る者其色
蕨の如の云々故は名付水繩ホは用

筒

字彙曰維舟竹索也纏筒筵筵並は同繫網に
用漢ハ引綱と云又竹と綱と云るは和漢遠より
漢ハ大竹を写刻よして作ると云へり 本邦網と
さる者桃枝竹と云ると委和本州と云へり

夫本

浮橋不竹のより総てくへく小舟あつて舟の川波

竹皮繩

竹の皮をひく繩と云ふ者
今大総は用ひも竹繩なり

麻苧繩

麻苧をてち繩と云ふ者
今大総は用ひも苧繩なり

楮繩

楮の皮をひく繩と云ふ者
今大総は用ひも楮繩なり

紙繩

今繩と云ふ細引は用ひも紙繩と云ふ

芭蕉繩

或人曰織布細繩といふは芭蕉繩と云ふ者
海船は用ひも芭蕉繩と云ふ者

よるぬ

細網

是ハ穉師の古網を以てくひの細網の古を以て
此の古也是をイハラと云ふ

菜網

菜の葉を以てくひの繩を以て大総と云ふ者

蒲網

蒲の葉を以て
今大総は用ひも蒲網なり

丈本

むやいさうぬれ不強のたえはくをあまれくへきもこすなり

アサコ網

是ハ蘆の穂を以て
今大総は用ひもアサコ網なり

クク網

是ハ道芝のこも也海邊はあつち海は用ひも
今大総は用ひもクク網なり

之ハ柔繩及苧帚等は化和名抄は沙草具

具と稱する者ハ是りと云ふなり

正木網

藤のうろとび細に打者より細ともいり
繫総破総に用又正木のうろとびて細をまひ
把木を引とらせよせよせよ

後撰

丁卯月と正木はつふよりりけてある別家人をつふらん
行系れたる

正十網

字未考津松南松前の首にて船の丈総に用
正十と云ふ木の皮を用て細に打者なり其を
正十と云ふ木の皮のうろとびて細をまひ
よ持あるを正十と云ふなり

